

5. 京都第二外環状道路関係遺跡

平成21年度発掘調査報告

長岡京跡右京第973次・下海印寺遺跡、西代遺跡、
奥海印寺遺跡、下海印寺遺跡

1. はじめに

今回の発掘調査は、京都第二外環状道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査で、国土交通省近畿地方整備局の依頼によって実施したものである。京都第二外環状道路は京都西南部の渋滞を緩和する目的で計画され、長岡京市域では、長岡京市南部を東西に流れる小泉川にそって山間部に至るルートが予定されている。

小泉川は現在、河川改修によって直線状に流路が変更されているが、本来は大きく蛇行しながら



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 京都西南部・淀)

ら流れていた。そのため河川の氾濫によってすでに遺構面が削平されている可能性も想定できた。一方、このルートは桓武天皇によって造営された長岡京の南部に当たる地域を横切ることになる。10年しか存続していなかった長岡京の宮域から最も離れた南部の様子を明らかにすることによって、都造営の状況を明らかにすることも期待された。

発掘調査の必要な所を特定することを目的に、平成15年から部分的な調査を先行して、調査可能な地域から順次行くと共に、面的な調査が必要な地域には発掘調査を実施してきた(岩松ほか2005、岩松ほか2006、岩松ほか2007、戸原・岩松・竹井2008、中川・大本2009、中川・戸原・岡崎ほか2009)。

調査対象地域は長岡京市調子から奥海印寺の広範囲にわたり、平成21年度には10地点を対象に調査を実施した。これらの地点は長岡京跡のほか、伊賀寺遺跡、下海印寺遺跡、奥海印寺遺跡、鈴谷遺跡、西代遺跡にも該当する。本報告書は長岡京跡右京第973次調査・下海印寺遺跡および西代遺跡、奥海印寺遺跡、下海印寺遺跡に関するものである。

平成21年度には、第970・983・988次調査も実施したが、別途報告する予定である。鈴谷遺跡の調査分は、平成22年度調査とあわせて平成23年度に報告する予定である。調査費用は国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所が負担した。なお、京都第二外環状道路に伴う発掘調査は、別途、西日本高速道路株式会社及び京都府負担でも実施している。

本報告書は戸原・増田・中川・竹井・黒坪・木村が執筆し、執筆か所については文末に明示した。遺物写真については当調査研究センター調査第1課資料係田中彰が撮影した。本報告書で使用した国土座標は現地記録も含め第Ⅵ系(日本測地系)を使用した。土層および遺物の色調は農林

付表 調査地一覧

番号	長岡京 右京次数	地区名	所在地	調査期間	調査面積	長岡京以外の 遺跡	備考
1	970	西条地区 OSJ-5	長岡京市下海印寺 西条	H21.4.8 ~ 22.2.19	4000㎡	下海印寺遺跡	別途報告
2	973	尾流地区 OOR-9	長岡京市下海印寺 尾流	H21.6.2 ~ 10.13	1000㎡	下海印寺遺跡	
3		方丸地区 OHR-15	長岡京市下海印寺 方丸	H21.6.8 ~ 10.13	540㎡		
4	京外	新郷地区 PNG-4	長岡京市奥海印寺 新郷	H21.6.3 ~ 6.19	150㎡	奥海印寺遺跡	
5	京外	駿河田地区 PSG-3	長岡京市奥海印寺 駿河田	H21.8.18 ~ 8.24	30㎡	下海印寺遺跡	
6	京外	西代地区 PNI-2	長岡京市奥海印寺 西代	H21.10.5 ~ 10.23	370㎡	西代遺跡	
7	983	下内田地区 OOD-11	長岡京市下海印寺 下内田	H21.9.8 ~ 10.13	100㎡	伊賀寺遺跡	別途報告
8	988	下内田地区 OOD-12	長岡京市下海印寺 下内田	H21.10.22 ~ 22.1.22	800㎡	伊賀寺遺跡	別途報告
9	京外	高山地区 PTY-2	長岡京市奥海印寺 高山	H21.10.19 ~ 12.22	600㎡	鈴谷遺跡	別途報告
10	京外	鈴谷地区 PSN-1	長岡京市奥海印寺 鈴谷	H22.1.18 ~ 2.25	250㎡	鈴谷遺跡	別途報告

水産技術会議監修の『新版標準土色帖』を用いた。

現地調査・報告に当たっては、京都府教育委員会、長岡京市教育委員会、(財)長岡京市埋蔵文化財センター職員のご指導とご助言をいただいた。地元下海印寺、奥海印寺の各自治会をはじめ地元の方々から多大なご協力を得ました。記してお礼申し上げます。

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸

調査担当者 調査第2課第2係長 森 正

主任調査員 引原茂治・戸原和人・竹原一彦・増田孝彦・中川和哉・森島康雄

専門調査員 竹井治雄・黒坪一樹・岡崎研一

主査調査員 柴 暁彦

調査員 奈良康正・村田和弘

調査場所 付表参照

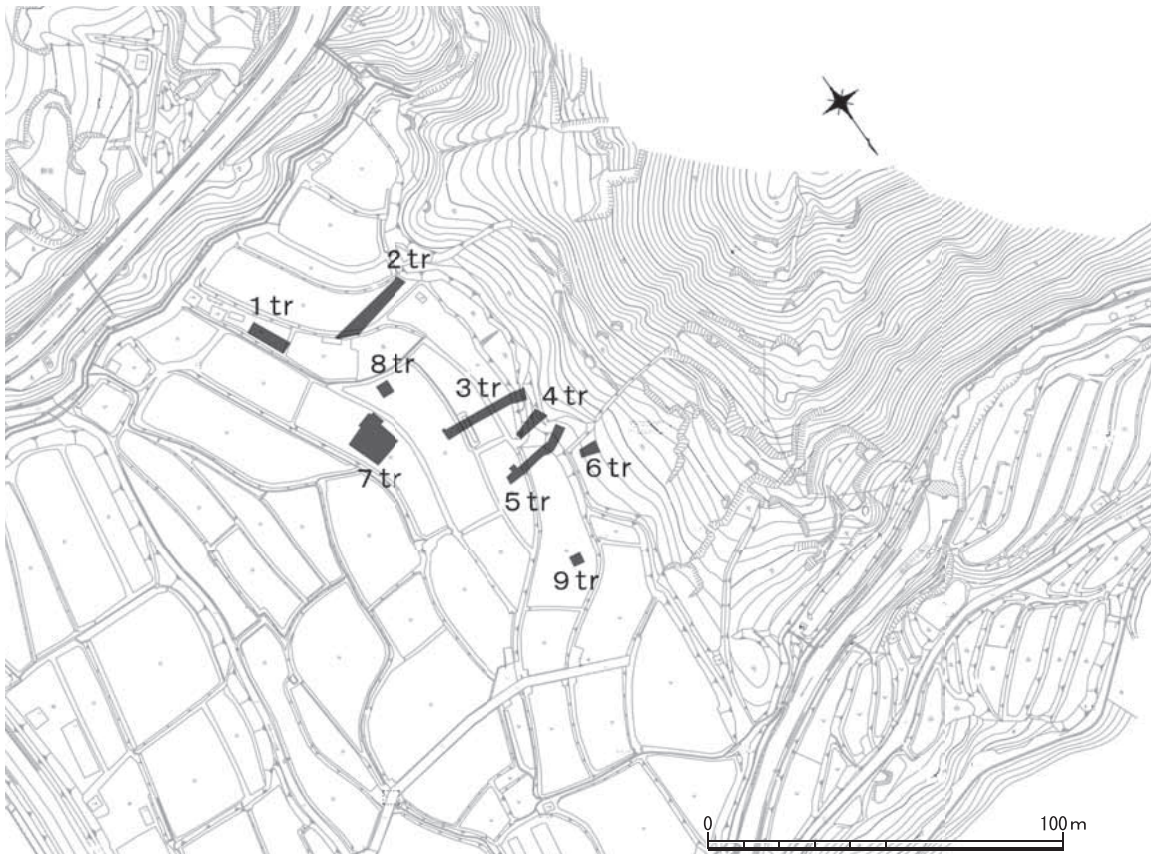
現地調査期間 付表参照

調査面積 付表参照

2. 西代遺跡(西代地区)

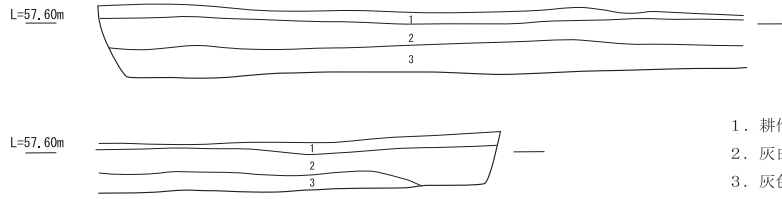
1)はじめに

西代遺跡は、長岡京市奥海印寺西代に所在する遺跡で、長岡京市教育委員会による試掘調査(木



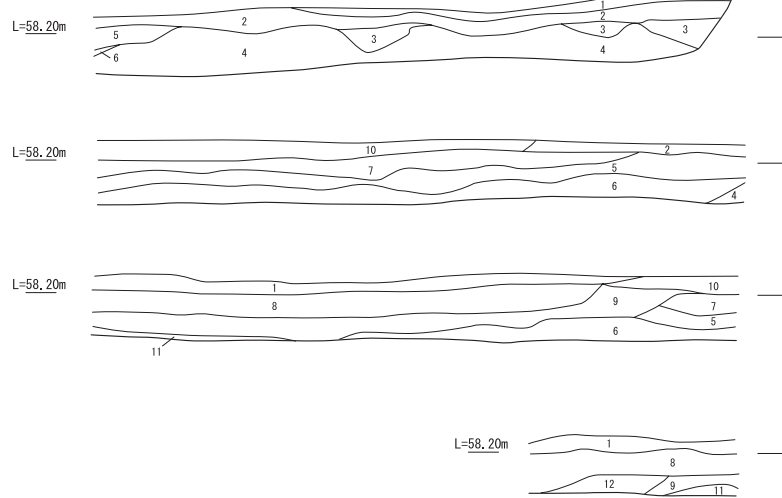
第2図 西代地区トレンチ配置図

1 トレンチ 東壁断面図



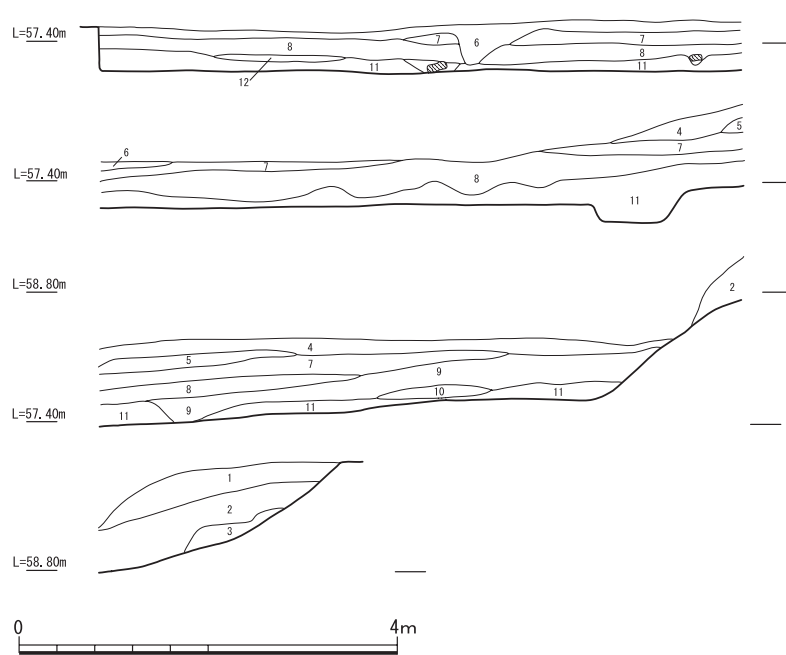
- 1. 耕作土
- 2. 灰白色粘質土 7.5Y7/2
- 3. 灰色砂礫 7.5Y5/1

2 トレンチ南壁断面図



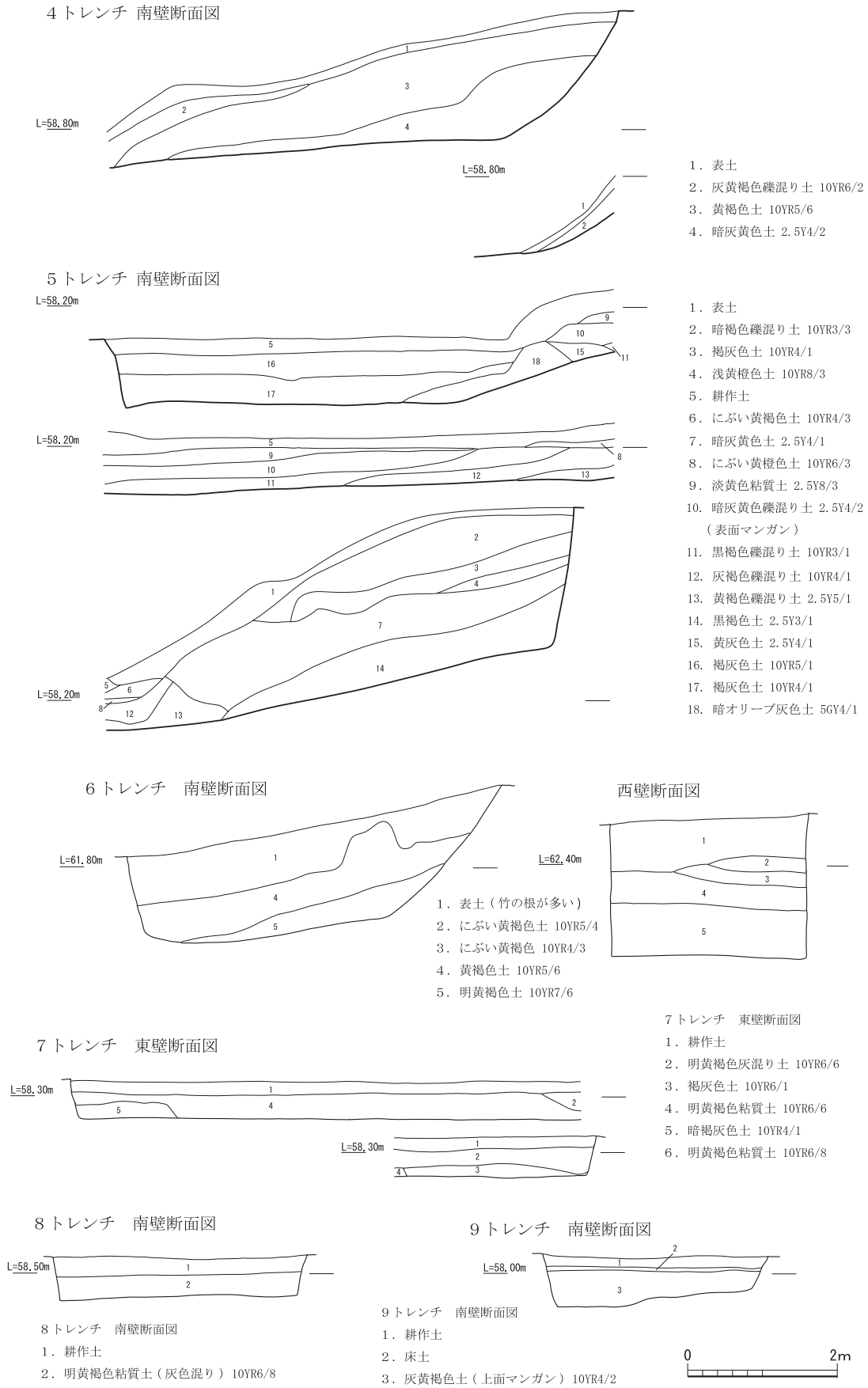
- 1. 耕作土
- 2. 灰色砂混粘質土 5Y5/1
- 3. 緑灰色砂 7.5GY6/1
- 4. 明緑灰色シルト～砂 7.5GY7/1
- 5. オリーブ灰色礫混粘砂質土 2.5GY6/1
- 6. 黄褐色礫 2.5Y5/3
- 7. 灰色礫混粘砂質土 N6/0
- 8. 明オリーブ灰色 2.5GY7/1
- 9. 灰色砂礫 N4/0
- 10. オリーブ灰色砂礫 2.5GY5/1
- 11. 浅黄色礫混粘質土 2.5Y7/4
- 12. オリーブ灰色シルト 5GY6/1

3 トレンチ 南壁断面図

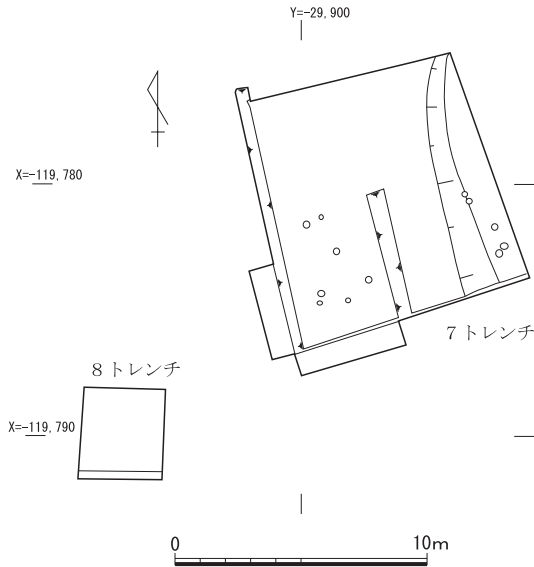


- 1. 表土 (竹根)
- 2. 暗褐色土 10YR3/4
- 3. 黒灰色土 7.5Y2/1
- 4. 耕作土
- 5. 灰色砂礫 N5/0
- 6. 暗褐色砂礫 10YR3/3
- 7. 灰色砂混粘質土 5Y5/1
- 8. オリーブ灰色礫混砂質土 2.5GY6/1
- 9. 黄褐色礫 2.5Y5/3
- 10. 黒灰砂 7.5Y2/1
- 11. 明緑灰色シルト～砂 7.5GY7/1
- 12. 黄灰色砂質土 2.5Y5/1

第3図 西代地区1～3トレンチ土層断面図



第4図 西代地区4～9トレンチ土層断面図



第5図 西代地区7・8トレンチ平面図

村2010)によって、古代から近世にかけての遺物が出土する遺跡として周知されている。その位置は、長岡京市の平野部では最西部、西山の丘陵との境部にあたり、比較的平坦な緩斜面を呈していた。小泉川右岸に位置し、現状は水田として利用されていた。平地と縁辺の山裾部分が、南北方向に直線状であるところが見てとれることから、人工的な土地の改変が想定された。

— 2)調査概要(図版第1～3)

今回の調査は、工事計画範囲内において9か所のトレンチを設定して実施した。掘削順に1～9トレンチと名づけた。調査地は水田として利用さ

れている緩斜面と、段を形成して竹藪として利用されている丘陵部分に分かれる。3～6トレンチの丘陵部では、近世以降の竹藪盛土が厚く堆積していた。水田に利用されていた部分では、耕作土および床土を除去した直下で、更新世に堆積した大阪層群の水性粘土を検出した。大阪層群の上面は平坦で、その上に床土・耕作土が水平に堆積していることから、水田の開墾に伴って大阪層群まで削平されたと考えられる。

調査の結果、9か所のトレンチのうち4・5・7・8トレンチの4か所については、古代から近世にかけての土器片(須恵器・土師器・瓦器等)が出土したが、いずれも本来の地層や遺構からの出土ではなかった。

また、7トレンチにおいては水田耕作土の直下が地山であり、ここで複数の柱穴を検出した。柱穴の広がりを確認するためにトレンチの拡張を行ったものの、それ以上の柱穴の広がり認められなかった。柱穴の深さは約5cm程度と浅いことから、本来の遺構面はかなりの厚さにわたって削平を受けているものと判断される。遺物の出土はなく、時期は不明である。

3)小結

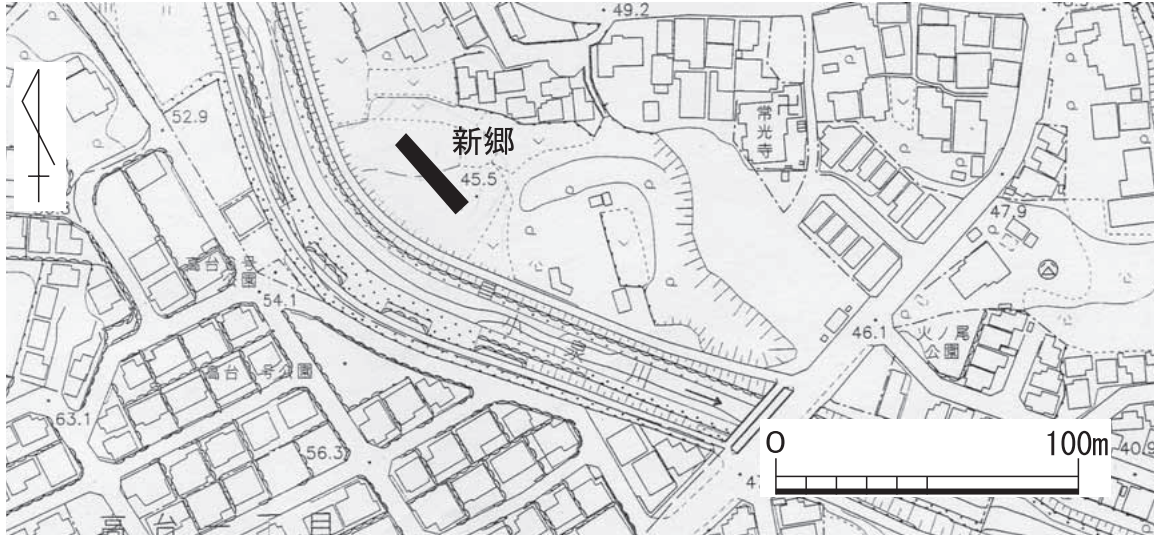
当該地点の調査では、古代から近世にかけての土器類が出土したが、農地造成のため旧来の地表面(遺構面)が大きく削平を受けており、若干の柱穴を確認するにとどまった。また、丘陵斜面の盛土中からも遺物が出土していることから、かつては丘陵部分から緩斜面部まで何らかの遺構が存在していたと想定できる。なお、当地域の遺構面を大きく削平させたと推定される大規模な農地造成については、現在の耕作者の記憶にはない、とのことである。

3. 奥海印寺遺跡(新郷地区)

1)はじめに

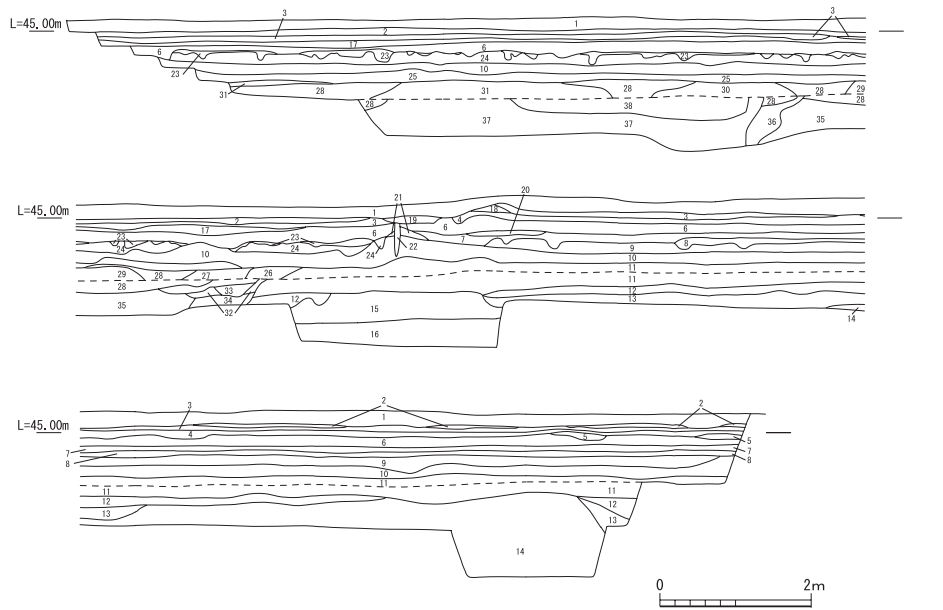
調査地は、長岡京市奥海印寺新郷に所在する。小泉川左岸に立地し、標高約45.5mである。周辺の地形から旧流路と考えられるくぼみ等が観察できた。調査前は水田として利用されていた。

新郷地区は奥海印寺遺跡に近接した地域にあり、良好な遺構が遺存している可能性が想定された。一方、小泉川に近接しているために遺構面が流出している可能性も想定され、まず、遺構面の有無を確認することを目的にトレンチを設定した。



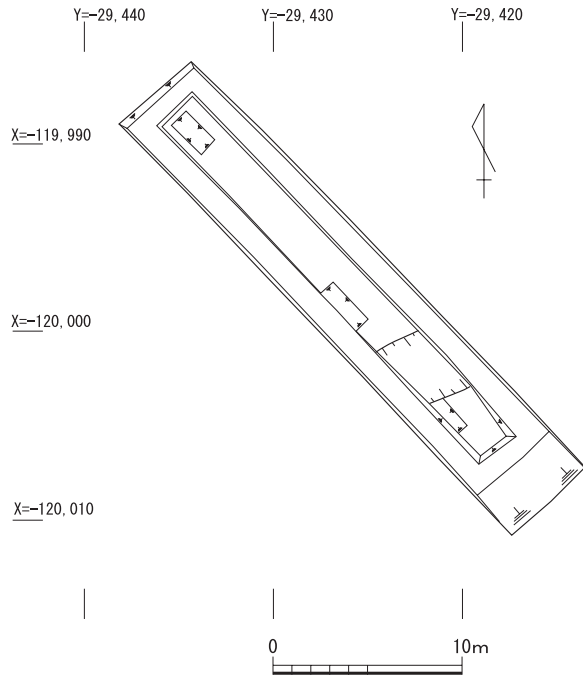
第6図 新郷地区トレンチ配置図

新郷 西壁断面図



- | | | |
|-------------------------------|----------------------------------|----------------------------------|
| 1. 灰色シルト 5Y4/1 (耕土) | 14. 灰色砂礫 5Y5/1 (人頭大以上の礫含む) | 27. 灰白色砂 5Y8/1 |
| 2. 灰黄褐色シルト 10YR6/2 | 15. 青灰色粘質土 10BG5/1 | 28. オリーブ黄色砂 5Y6/3 |
| 3. 明黄褐色シルト 10YR7/6 | 16. 橙色砂礫 7.5YR6/8 (拳~人頭大礫含む) | 29. 暗褐色砂礫 10YR3/4 (親指大~拳大の礫を含む) |
| 4. 褐色シルト 10YR6/1 | 17. にぶい黄褐色シルト 10YR6/4 (マンガング粒含む) | 30. 黄褐色砂礫 10YR5/6 (親指大~拳大の礫を含む) |
| 5. にぶい黄褐色シルト 10YR7/2 | 18. 明褐色シルト 7.5YR5/6 | 31. 黄褐色砂 10YR7/8 |
| 6. 明黄褐色シルト 10YR6/6 (マンガング粒含む) | 19. 明褐色シルト 7.5YR5/8 | 32. 浅黄色細砂 2.5Y7/4 |
| 7. 褐色砂 10YR6/1 (礫含む) | 20. 灰白色細砂質土 10YR7/1 | 33. オリーブ灰色粗砂 2.5GY6/1 |
| 8. 灰オリーブ色細砂 5Y6/2 | 21. 浅黄色細砂 2.5Y7/3 | 34. 黄灰色細砂 2.5Y6/1 |
| 9. 浅黄色シルト 5Y7/3 | 22. 灰白色シルト 2.5Y7/1 | 35. にぶい黄褐色砂礫 10YR7/4 (拳大以下の礫を含む) |
| 10. 灰白色粘質土 5Y7/2 | 23. 明黄褐色細砂 2.5Y6/8 | 36. 灰オリーブ色シルト 7.5Y6/2 |
| 11. 明緑灰色粘質土 7.5GY7/1 | 24. 灰色シルト 5Y6/1 | 37. 暗灰黄色砂礫 2.5Y5/2 (拳大~人頭大の礫を含む) |
| 12. 浅黄色粘質土 7.5Y7/3 | 25. 灰白色シルト 7.5Y7/2 | 38. 黄褐色砂 2.5Y5/3 |
| 13. 灰色粘質土 N6/1 | 26. 灰黄色砂 2.5Y7/2 | |

第7図 新郷地区トレンチ土層断面図



第8図 新郷地区トレンチ平面図

新郷地区では短辺5m、長辺30mの長方形のトレンチを設定し、平成21年6月3日から同年6月19日まで現地調査を実施した。

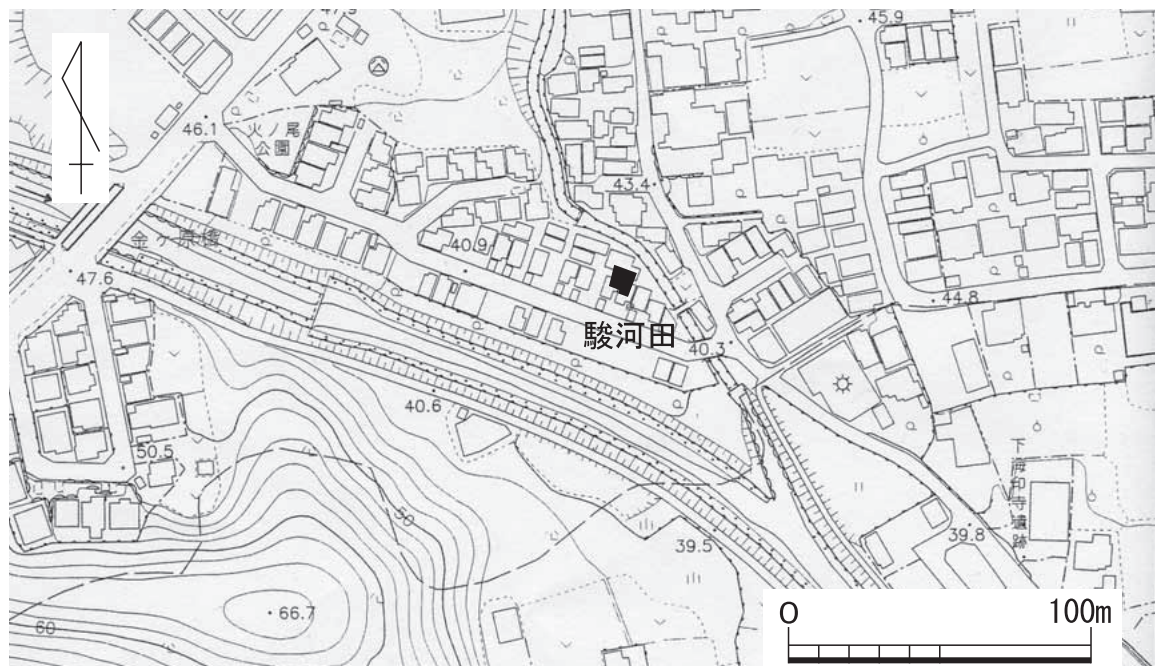
2) 調査概要(図版第4)

- 地表下50cmまでは耕作や整地に伴う水平堆積層で、それ以下はラミナ状の堆積を示す礫・砂を主体とする河川堆積物であった。調査トレンチは面的には地表下1.8mまで掘削し、部分的に2.7mまで掘り下げたが安定した地層は検出できなかった。第8図に示した河川跡はある時期の1つの流路(第7図37・38層に対応)であるが、遺物は含まれていなかった。耕作土および床土から染付の茶椀片が出土したが、河川堆積層からの遺物の出土はなく、堆積時期は不明である。

耕作土および床土から染付の茶椀片が出土したが、河川堆積層からの遺物の出土はなく、堆積時期は不明である。

3) 小結

新郷地区では耕作関連の土層のすぐ下に河川の氾濫による堆積土があり、良好な遺構面を検出できなかった。土層の堆積状況からは、水田耕作に伴う堆積土を除くと、この地区が離水していた可能性は極めて低いと考えられる。



第9図 駿河田地区トレンチ配置図

4. 下海印寺遺跡(駿河田地区)

1)はじめに

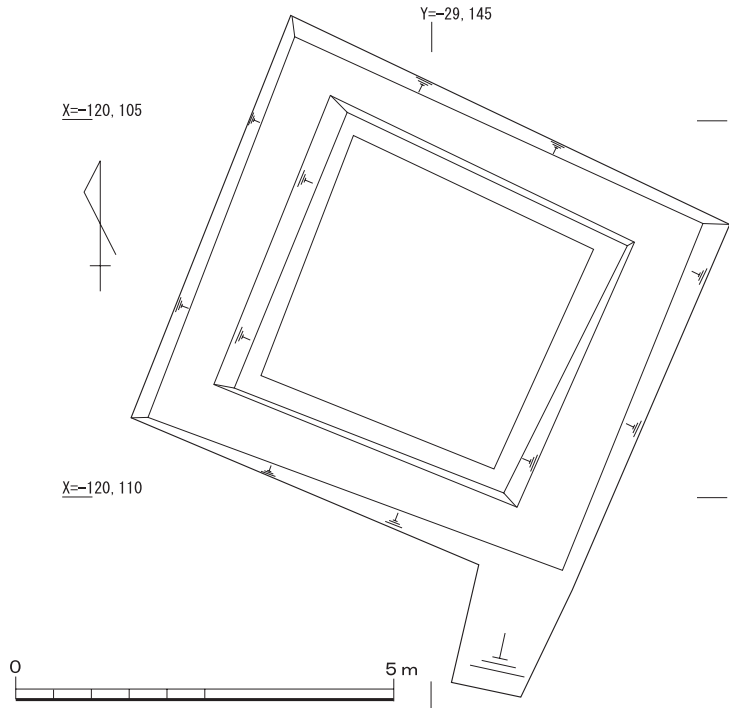
駿河田地区の発掘調査地は、小泉川左岸の長岡京市奥海印寺駿河田に所在する。調査前は宅地であった。5m×6mのトレンチを設定し、30㎡の発掘調査を平成21年8月18日から同年8月24日まで実施した。

2)調査概要(図版第4)

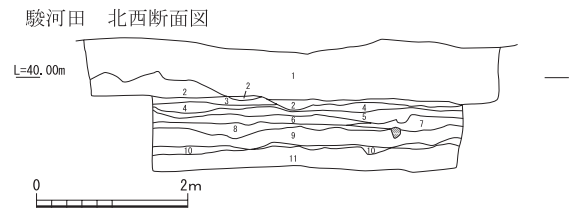
地表下80cmまでは宅地造成に伴う盛土層で、次に数枚の砂質土～粘砂質土層が続き、地表下1.3mで河川堆積と判断される砂礫層に到達した。砂礫層を50cmほど掘り下げたが、層相に変化は認められなかった。出土遺物はない。

3)小結

駿河田地区では、包含層および遺構面は確認できなかった。この地域は小泉川とその支流に囲まれた地域であることから、川の氾濫による堆積物と考えられ、安定した遺構面や遺物が確認できなかったものと推測される。



第10図 駿河田地区トレンチ平面図



- | | |
|----------------------------|---------------------|
| 1. 盛土 | 7. 黄灰色粘質土 2.5Y5/1 |
| 2. 緑灰色粘砂質土 10G5/ | 8. 灰黄色礫混砂質土 2.5Y6/2 |
| 3. 灰黄褐色礫混砂質土 (5cm) 10YR6/2 | 9. 暗灰黄色粘砂質土 2.5Y4/2 |
| 4. 明黄褐色 10YR6/6 | 10. 黄褐色粘砂質土 2.5Y5/4 |
| 5. 褐灰色礫混砂質土 (10cm) 10YR5/1 | 11. 灰色砂礫層 10Y4/1 |
| 6. 黄灰色粘砂質土 2.5Y5/1 | |

第11図 駿河田地区トレンチ土層断面図

(中川和哉)

5. 長岡京跡右京第973次(7AN00R-9・OHR-15地区)・下海印寺遺跡(尾流・方丸地区)

1)はじめに

調査は、小泉川の河岸段丘上に位置する尾流地区と、その北側に広がる低位段丘上の縁辺部の方丸地区で実施した。この両地区の間は道路により隔たれており、最大3mの段差がある。両地区とも、縄文時代～近世にかけての集落跡である下海印寺遺跡に含まれている。周辺では多くの調査が行われ、縄文時代から中世にかけての遺構・遺物が多数検出されている。また、長岡京条坊復原によると、尾流地区のみが京内にあたり、右京七条四坊および西四坊大路が想定されることである。

本調査報告は、現地調査担当者が分担して執筆し、文末に文責を記した。また、出土遺物のうち、縄文土器については京都大学大学院生木村啓章が、石器については当調査研究センター専門

調査員黒坪一樹が執筆した。

(増田孝彦)

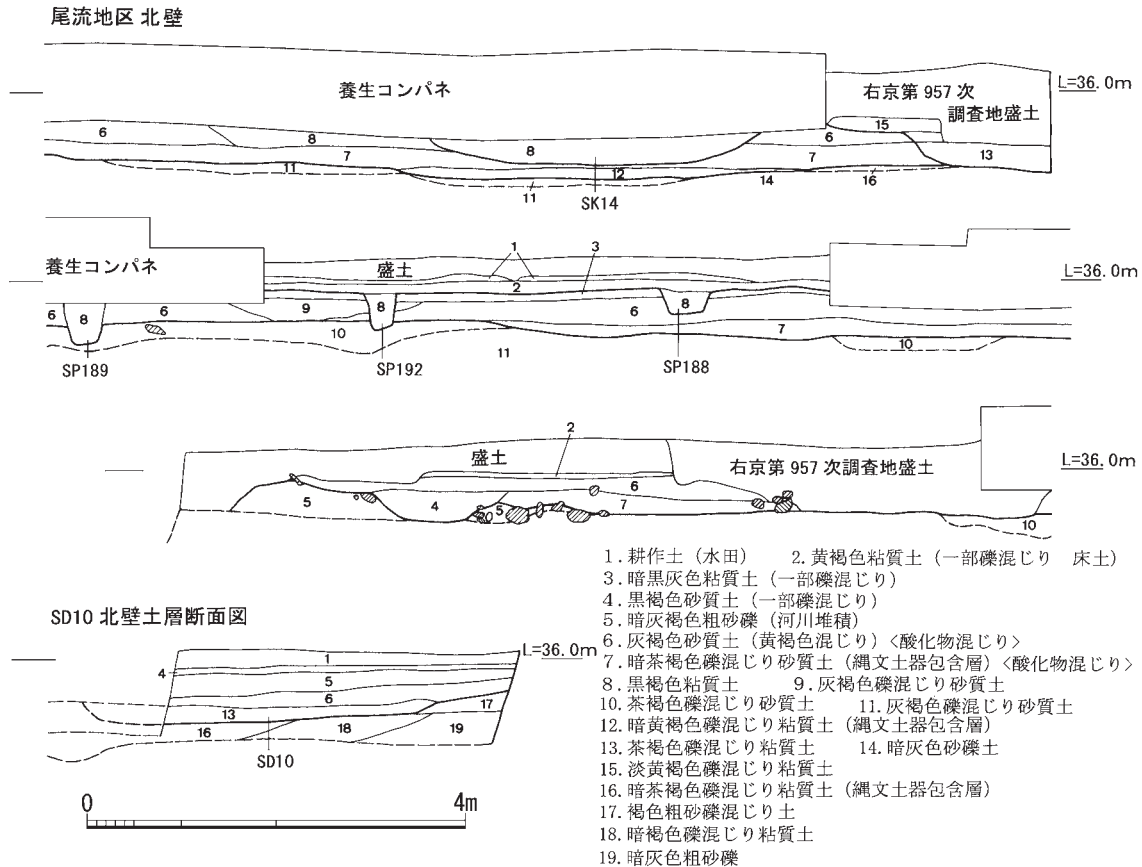
2)尾流地区(第12・13図、図版第5)

(1)はじめに

尾流地区では、調査地北側の平成20年度に実施した右京第957次調査で、縄文時代後期の土坑5基、弥生時代後期の竪穴式住居跡1基、古墳時代後期の土坑1基、奈良時代の掘立柱建物跡3棟、土坑1基が検出されている。南東側は右京第862・870次調査が実施されている。隣接して実施したこれらの調査トレンチに接続するように、今回のトレンチを設定した。現地調査は平成21年6月2日から10月23日までを要した。調査面積は1000㎡である。



第12図 尾流・方丸地区調査トレンチ配置図



第13図 尾流地区トレンチ北壁土層断面図

調査地の現況は水田であり、小泉川の河岸段丘上に立地し、北側の高位部分と南側の一段やや低い水田部からなる。耕作土の下には薄い床土(第2層黄褐色粘質土)、その下層は遺物包含層である第4層黒褐色砂質土が約10cm堆積し、これを除去すると基盤層である第6層の灰褐色砂質土となり、この層の上面で弥生時代・古墳時代の遺構を検出した。トレンチ中央の北壁で検出したS B184は、遺物包含層である第4層の黒褐色砂質土より柱穴が掘り込まれていた。

弥生時代・古墳時代遺構面の下層は、縄文土器を含む第6層灰褐色砂質土の遺物包含層を全面で確認し、河岸段丘南端部付近で基盤層となる第7層暗茶褐色礫混じり砂質土ないし第5層暗灰褐色粗砂礫（河川堆積）より縄文時代後期の土坑・柱穴を検出した。5層の暗灰褐色粗砂礫（河川堆積）は、西側から流れ込んできたような堆積状況であり、層が波をうって堆積し、その凹み部分には淡茶褐色ないし灰褐色の砂質土が縄文土器とともに堆積していた。

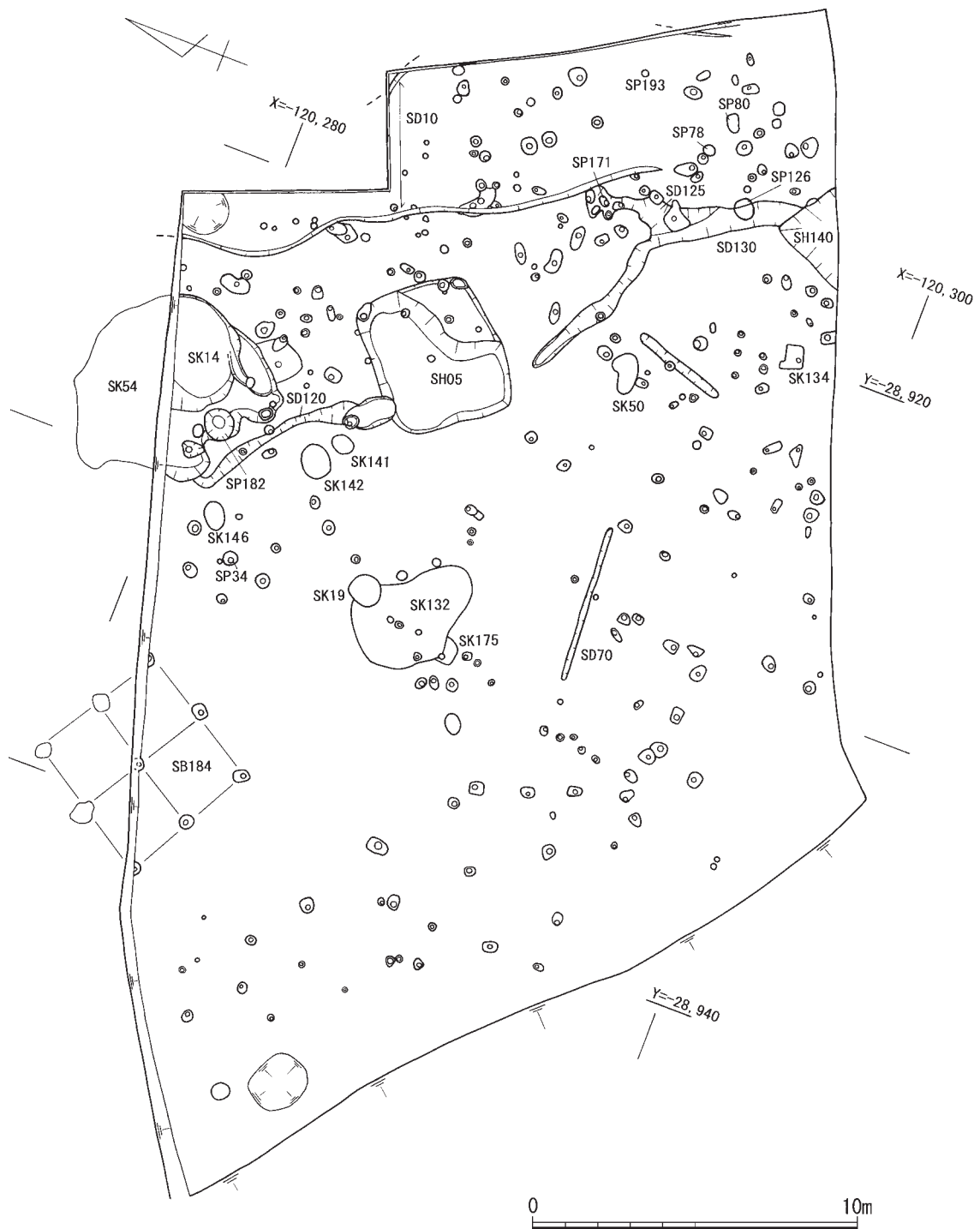
(増田孝彦)

(2) 検出遺構

① 弥生時代～奈良時代(第14図、図版第5)

検出した遺構は、竪穴式住居跡2基、溝3条、土坑8基、その周辺で多くの柱穴を検出したが、掘立柱建物跡は1棟しか復原することができなかった。

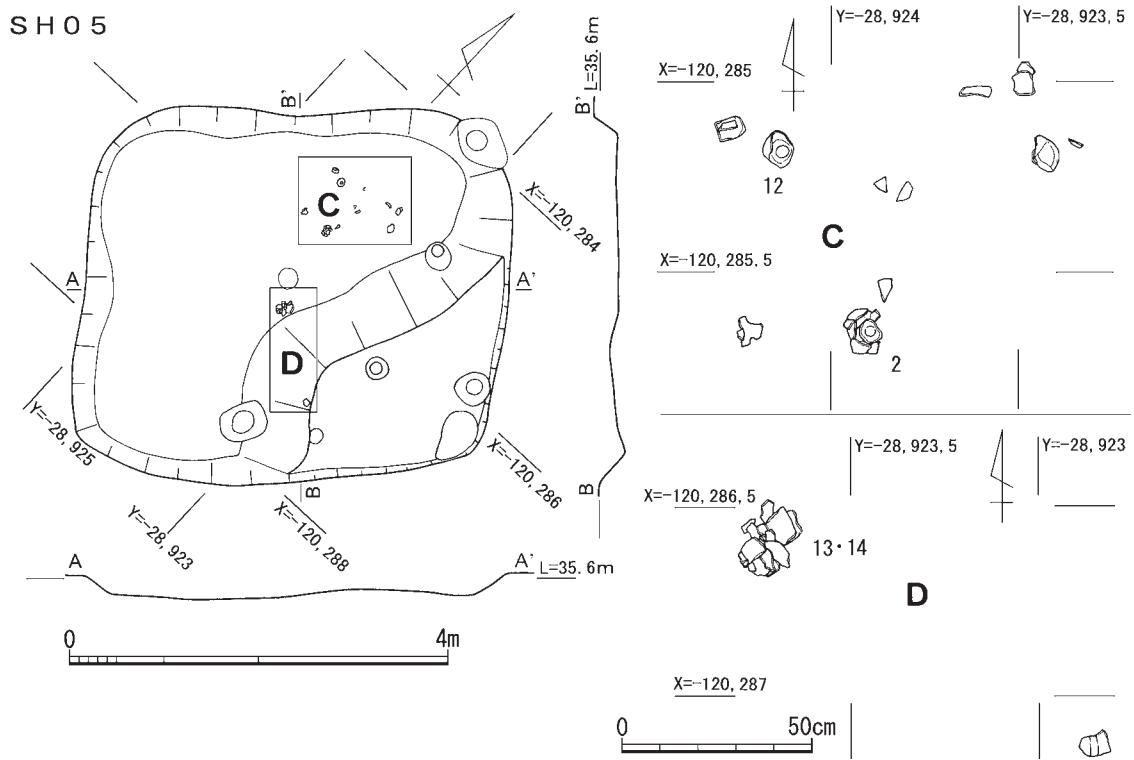
竪穴式住居跡 SH05(第15図、図版第5) トレンチ中央やや北東側で検出した。土坑である可能性も残るが竪穴式住居跡と判断した。方形の平面形をなし長辺4.2m×短辺3.8m、深さ0.25m



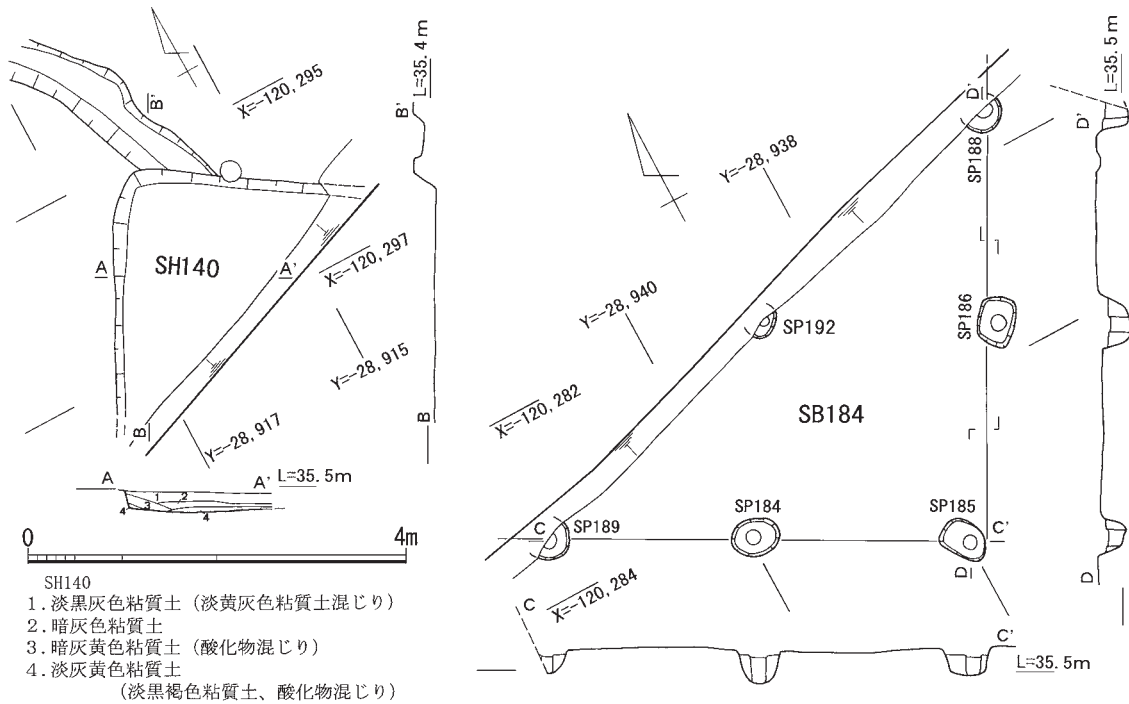
第14図 尾流地区上層遺構平面図

を測る。住居東側約1/3はベッド状に一段高くなる。検出面においては、多くの礫が混入しており、この礫は床面直上にまで及ぶ部分もある。礫を除去した段階で多くの小片化した弥生土器甕・高杯類が床面上で出土した。床面には柱穴等は認められなかった。弥生時代後期に位置づけられる。

竪穴式住居跡 SH140 (第16図、図版第6) 調査地東南端、右京第862次調査地との境付近で検出した。溝 S D130と切り合い関係を有し、この住居跡が先行する。住居北角付近のみを検出したもので、南西辺 3 m × 北東辺 2 m、深さ 0.22 m を検出した。右京第862次調査地ではこの住



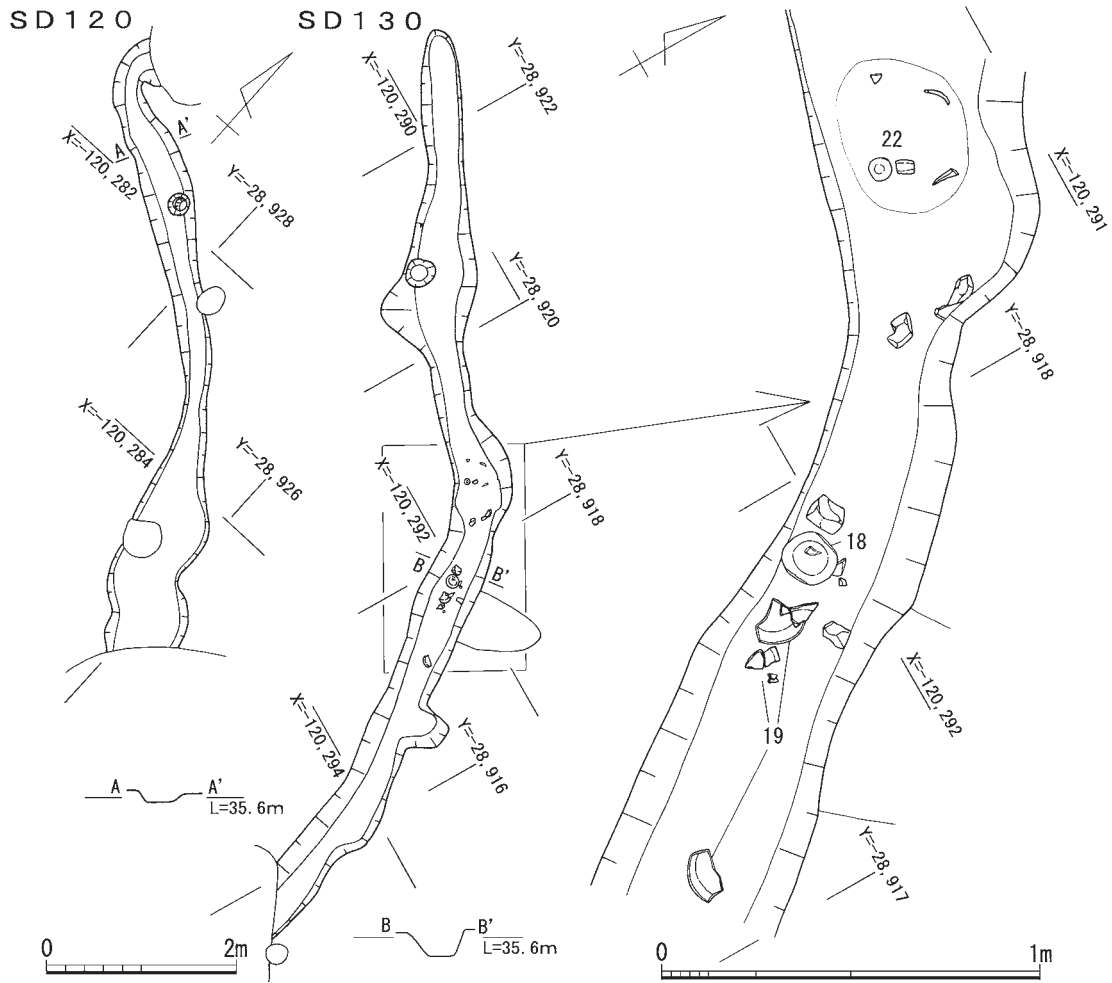
第15図 尾流地区竪穴式住居跡SH05実測図及び遺物出土状況図



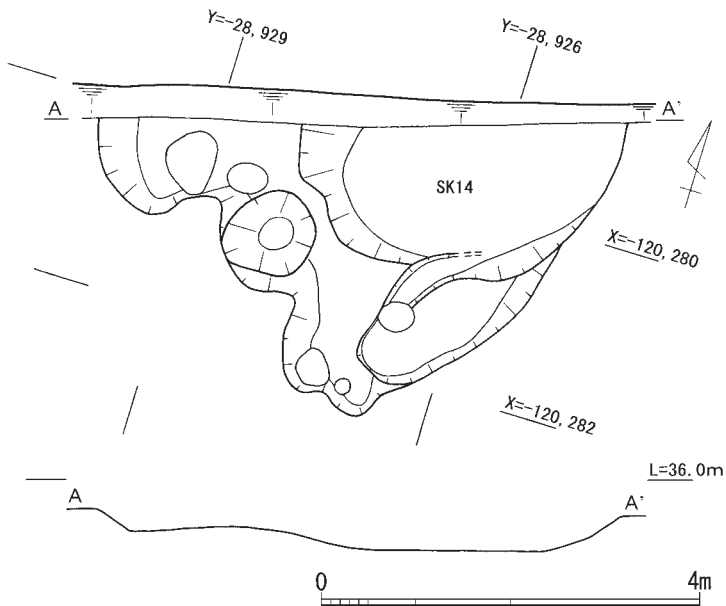
第16図 尾流地区竪穴式住居跡SH140・掘立柱建物跡SB184実測図

居の延長部が検出されていないので、水田の開墾や耕作等により削平されたものと考えられる。柱穴は、残存している範囲の中では検出されなかった。内部より小片化した須恵器片・土器器片が少量出土した。古墳時代後期に位置付られる。

掘立柱建物跡SB184(第16図、図版第6) 4トレンチ中央部の北西壁寄りで検出した。建物



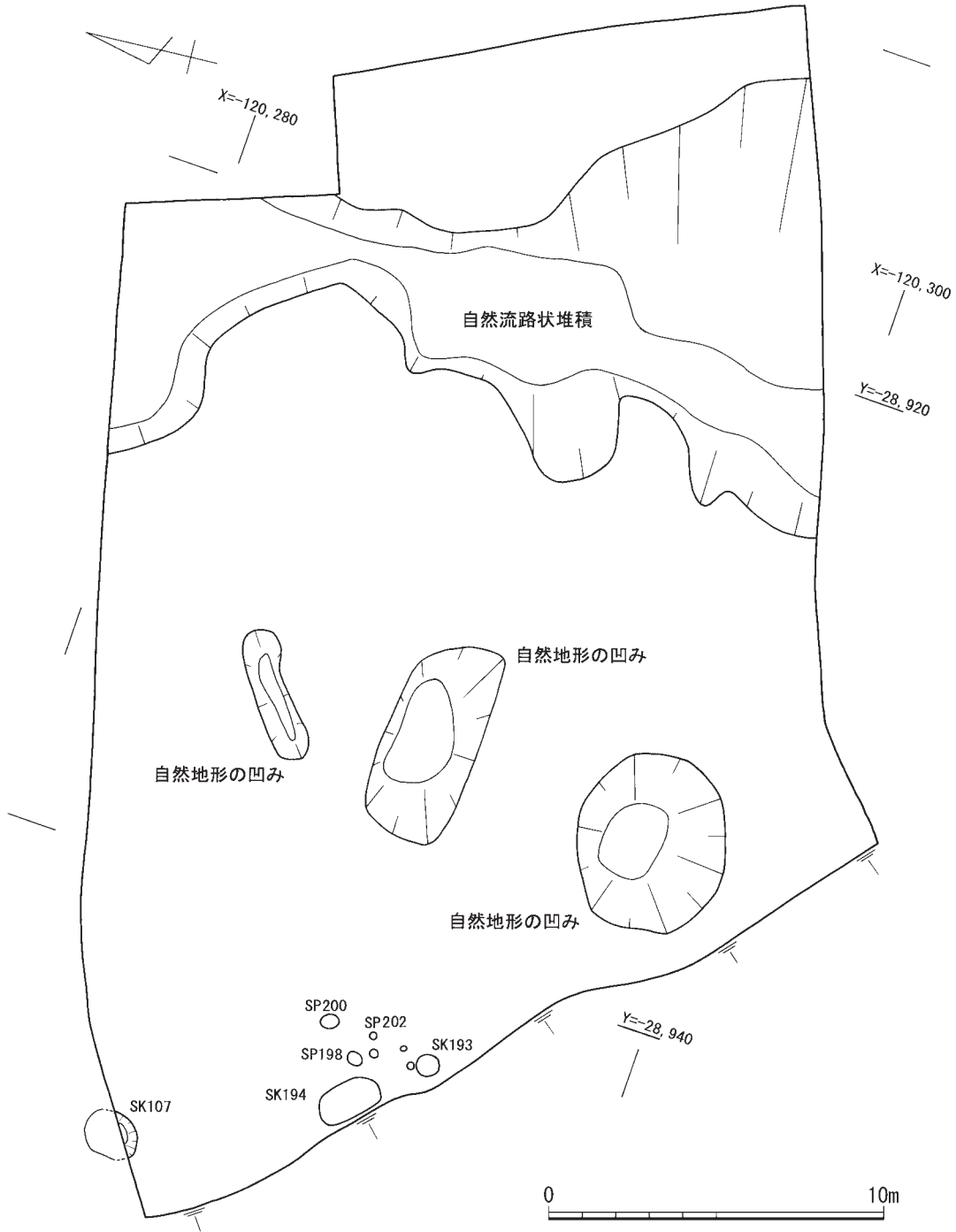
第17図 尾流地区溝 S D120・S D130実測図及び S D130遺物出土状況図



第18図 尾流地区土坑 S K14実測図

の約半分は、右京第957次調査地で柱穴が検出されている。建物は2間×2間の規模を持ち、柱間隔は2.2～2.3mである。柱穴の掘形は楕円形ないし方形に近いもので、長径ないし長辺0.5m×短径ないし短辺0.4m、深さ0.3～0.35mを測る。柱穴内より小片化した須恵器・土師器が出土した。古墳時代後期に位置づけられる。

土坑 SK14 (第18図、図版第6) 右京第957次調査地で検出されていた SK54の延長部分に当たる。溝 S D120と切り合い関係を



第19図 尾流地区下層遺構平面図

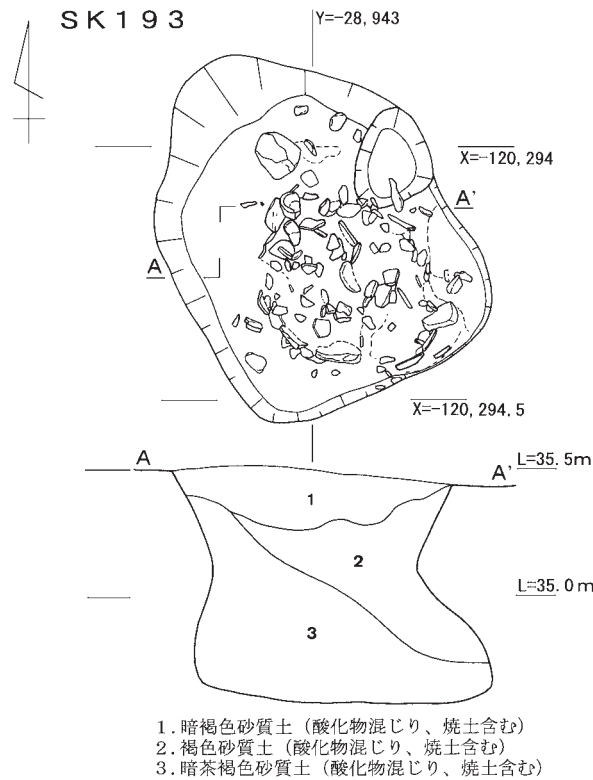
有し、先行する。検出長5.5m、幅2.8mを測り、中央部分が長さ2.4m、幅1.6mにわたり、0.19mの深さで一段低くなる。検出面からの深さは、最深部で0.36mを測る。埋土中より縄文土器、石錐・滑石製管玉、須恵器・土師器の小片などの遺物が出土した。古墳時代後期に属すると考えられる。

土坑SK50 竪穴式住居跡SH05の南西側で検出した。楕円形の平面形を呈し、長軸0.9m、短軸0.7m、深さ0.2mを測る。土師器・須恵器の小片が出土し、古墳時代後期と判断される。

土坑SK132 竪穴式住居跡SH05の西側で検出した。いびつな楕円形の土坑で、長軸4.1m、

短軸2.5m、深さ0.1mの浅い土坑である。遺物の出土は土師器・須恵器の小片のみで、古墳時代後期と判断される。

溝SD120・130(第17図、図版第7) 土坑SK14から竖穴式住居跡SH05の北辺付近にまで通じ、そこでいったん途絶える。SH05の南辺の南側で溝の掘削が認められ、そこから竖穴式住居跡SH140まで延びる。埋土及び断面形状などから一連の溝と考えられる。切り合い関係で見るとSH140・SK14に後出する。竖穴式住居跡SH05より西側は検出長6.5m、溝幅0.3~0.8m、



深さ0.18mを測る。東側は検出長10m、幅0.4~0.6m、深さ0.25mを測る。東側で検出した溝中央部付近で須恵器(18・19)、土師器(22)がまとまって出土している。古墳時代後期に属する。

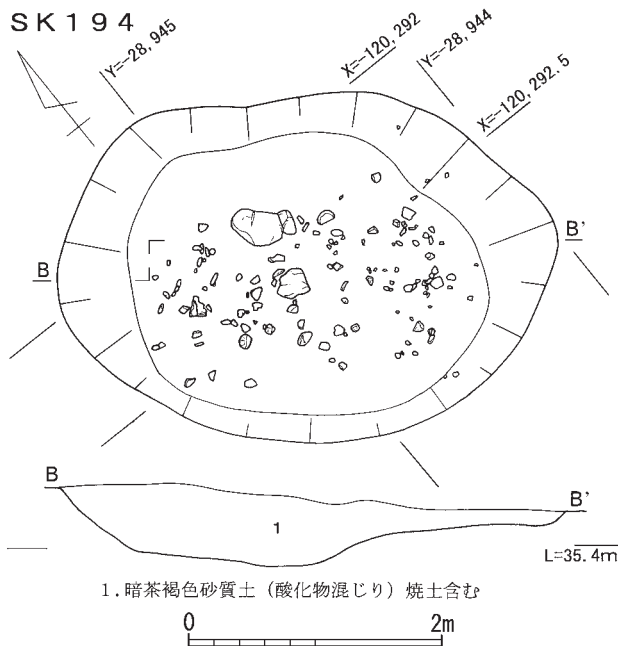
溝SD10 トレンチ北東側、台地の裾部分に沿って検出した浅い溝である。検出長17m、幅5m、深さ0.2m。溝東端では、ほとんど痕跡が認められなくなる。縄文土器・須恵器・土師器など小片化した遺物とともに須恵器杯蓋(16・17)が出土した。段丘の裾を巡る位置にあるが、その性格は不明である。

溝SD70 トレンチ中央部で検出した浅い東西溝である。溝幅0.3m、深さ0.07m、検出長5mで埋土中より須恵器杯(15)が出土した。奈良時代の遺構と考えられる。

②縄文時代(第19図、図版第7・8)

下層遺構面では、縄文時代後期の土坑2基、その周辺で柱穴6か所を検出した。

土坑SK193(第20図、図版第8・9) 南西端で検出したもので、長軸0.8m、短軸0.68mの楕円形を呈し、検出面からの深さ0.45mを測る。検出面から底面まで多くの縄文土器片が出土するとともに、底面より石皿・敲石が出土した。縄文時代後期に属する。



土坑SK194(第20図、図版第9) 土坑SK193の西側で検出した。いびつな方形

第20図 尾流地区土坑SK193・194実測図

の平面形を呈し、検出長2m、同幅1.2m、土坑北寄り是一段深くなる。検出面からの深さ58.2cmを測る。壁面の観察により、水田の開墾時に大きく削平を受けている。土坑SK193同様、検出面から底面まで縄文土器小片が出土した。縄文時代後期に属する。

柱穴群 調査トレンチの西辺で検出したもので、径20~50cm、深さ10~20cmの規模を有する。埋土中から、縄文土器小片が出土している。

(増田孝彦)

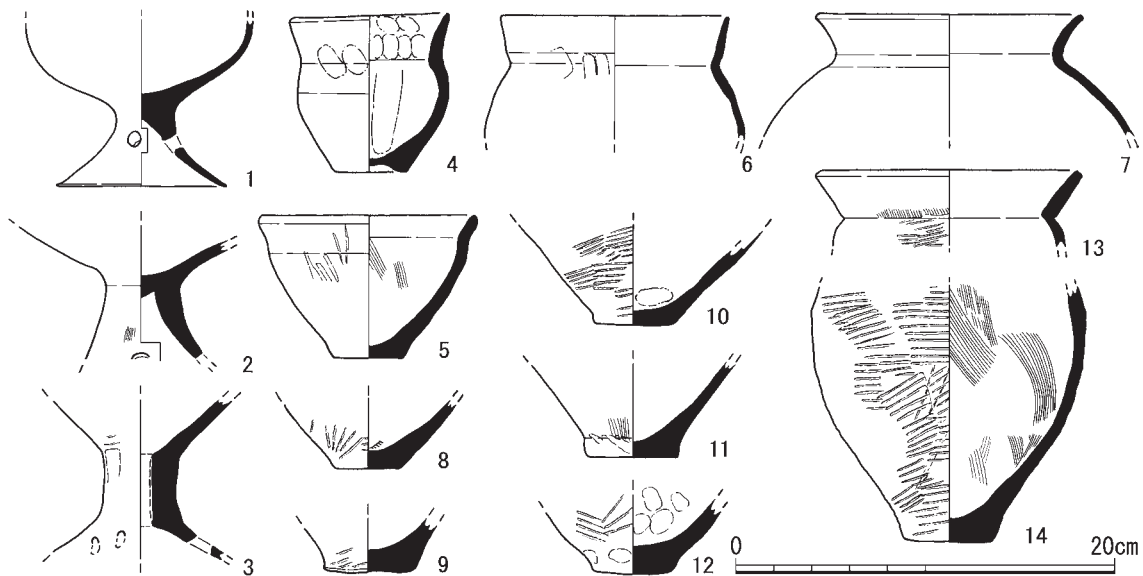
(3) 出土遺物(第21~27図、図版第13~16)

調査では、縄文時代の土坑、弥生時代の竪穴式住居跡、古墳時代の竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・土坑・溝、奈良時代頃の溝などの遺構から遺物が出土するとともに、包含層中からも多くの遺物が出土した。出土遺物の総量は、整理箱で13箱である。

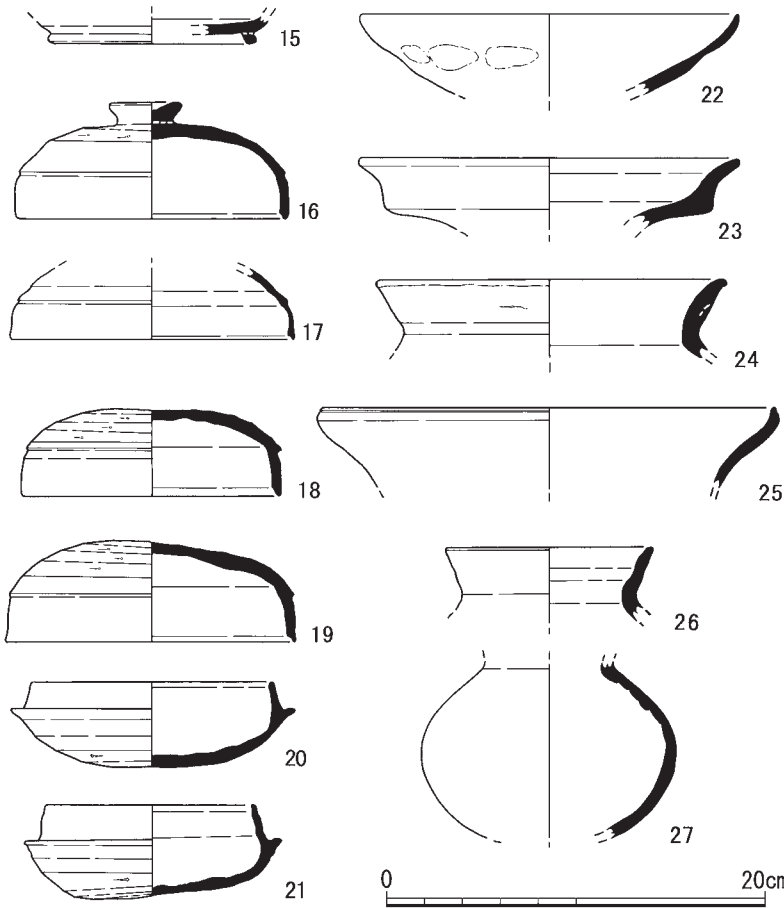
① 弥生時代~奈良時代(第21~23図、図版第13)

1~14は、竪穴式住居跡SH05から出土した土器である。1・2は高杯である。脚部に円形の透かし穴がある。3は器台である。脚部に連続した円形の透かし穴が認められる。4は小型の壺で、口径8.15cm、器高8.35cmを測る。口縁内面と頸部外面に指オサエの痕跡が残る。5は「く」の字状口縁をもつ小型の鉢である。6は口縁部が屈曲してやや直立気味に立ち上がる甕で、口径11cm測る。7は「く」の字状に外反する口縁部をもつ。8~12は壺・甕の底部である。8~10・12は外面にタタキを施す。11は外面はハケ調整である。13・14は同一個体と考えられるもので、13は口径15.4cm、頸部外面に横方向のタタキ、口縁部はハケ調整を施す。14は、体部下半部は斜め方向のタタキを施し、上半部は横方向のタタキを施す。

15は須恵器杯Bである。輪状の高台が底部端近くに付される。SD70より出土した。16・17はSD10より出土した。16はツマミの付く須恵器有蓋高杯の蓋である。口径14.1cm、器高6.2cmを測る。焼成が良好で淡灰色を呈する。17は須恵器杯蓋である。天井部がやや丸みを帯び、口縁基

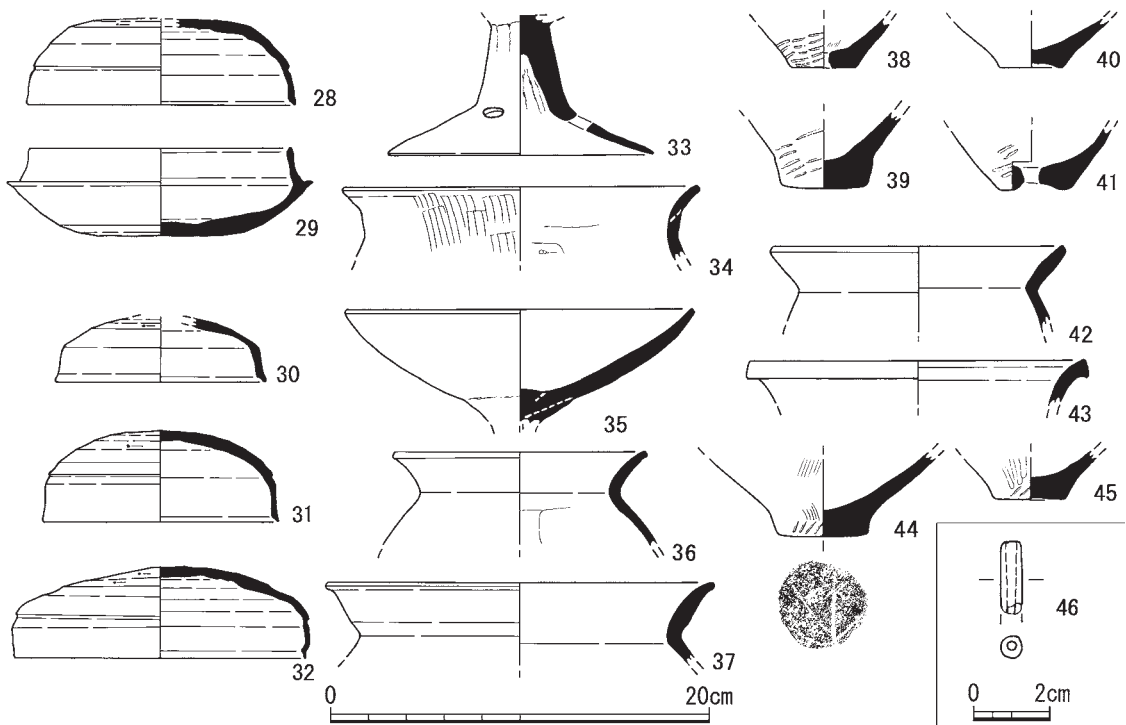


第21図 尾流地区出土遺物実測図(1)



第22図 尾流地区出土遺物実測図(2)

部に一条の凹線が巡る。18～23、25～27は S D130より出土した。18・19は須恵器杯蓋である。丸みを帯びた天井部と下方にのびる口縁部からなる。天井部外面はヘラ削りを施す。口縁基部に一条の凹線が巡る。19はやや大型で口径15.1cm、器高5.4cmを測る。天井部中央付近にヘラ記号「※」が認められる。20・21は須恵器杯身である。丸みを帯びた底部と内側上方に立ち上がる口縁部からなる。底部外面はヘラ削りを施す。22は土師器杯で、口径19.8cmを測る。23は土師器高杯の杯部である。口縁が



第23図 尾流地区出土遺物実測図(3)

大きく外反する。口径19.8cmを測る。25は甕で、口縁端部を上方につまみ上げる。26・27は土師器の丸底壺である。26は口径10.8cmを測る。24は甕で、「く」の字状に外反する口縁部をもちSK142より出土した。

28・29はSK14より出土した。28は須恵器杯蓋である。丸みを帯びた天井部と下方にのびる口縁部からなる。天井部外面はヘラ削りを施す。口縁基部に一条の凹線が巡る。口径14cm、器高4.6cmを測る。29は須恵器杯身である。丸みを帯びた底部と内側上方に立ち上がる口縁部からなる。底部外面はヘラ削りを施す。口径13.6cm、器高4.7cmを測る。30～32は須恵器杯蓋である。口縁基部に一条の凹線が巡る。32は大型のもので口径15.2cm、器高4.85cmを測る。30はSP34、31はSP171、32はSP126から出土した。33は土師器高杯脚部である。脚部に円形の透かし穴が認められる。SK14より出土した。34は土師器甕である。頸部から口縁部にかけてハケ調整で、SK14より出土した。35は高杯杯部である。口径18.1cmを測り、SP193より出土した。36・37・42は「く」の字状に外反する口縁部をもつ甕である。36はSP193、37はSK142より出土した。38～40、44・45は弥生土器壺・甕の底部である。38・39は外面に斜め方向のタタキを施し、44は外面底部付近はタタキ、上方はハケ調整を施す。45は外面底部付近はタタキ、上方はミガキ調整を施す。41は有孔鉢底部片である。42は弥生土器甕である。43は弥生土器大型壺の口縁部である。口径35.4cmを測る。38はSK14、39はSK132、40はSP80、41はSP78、42～45は包含層中より出土したものである。46はSK14より出土した緑色凝灰岩製管玉で灰白色を呈し、残存長1.9cm、最大孔径2.7mmを測る。片側穿孔である。

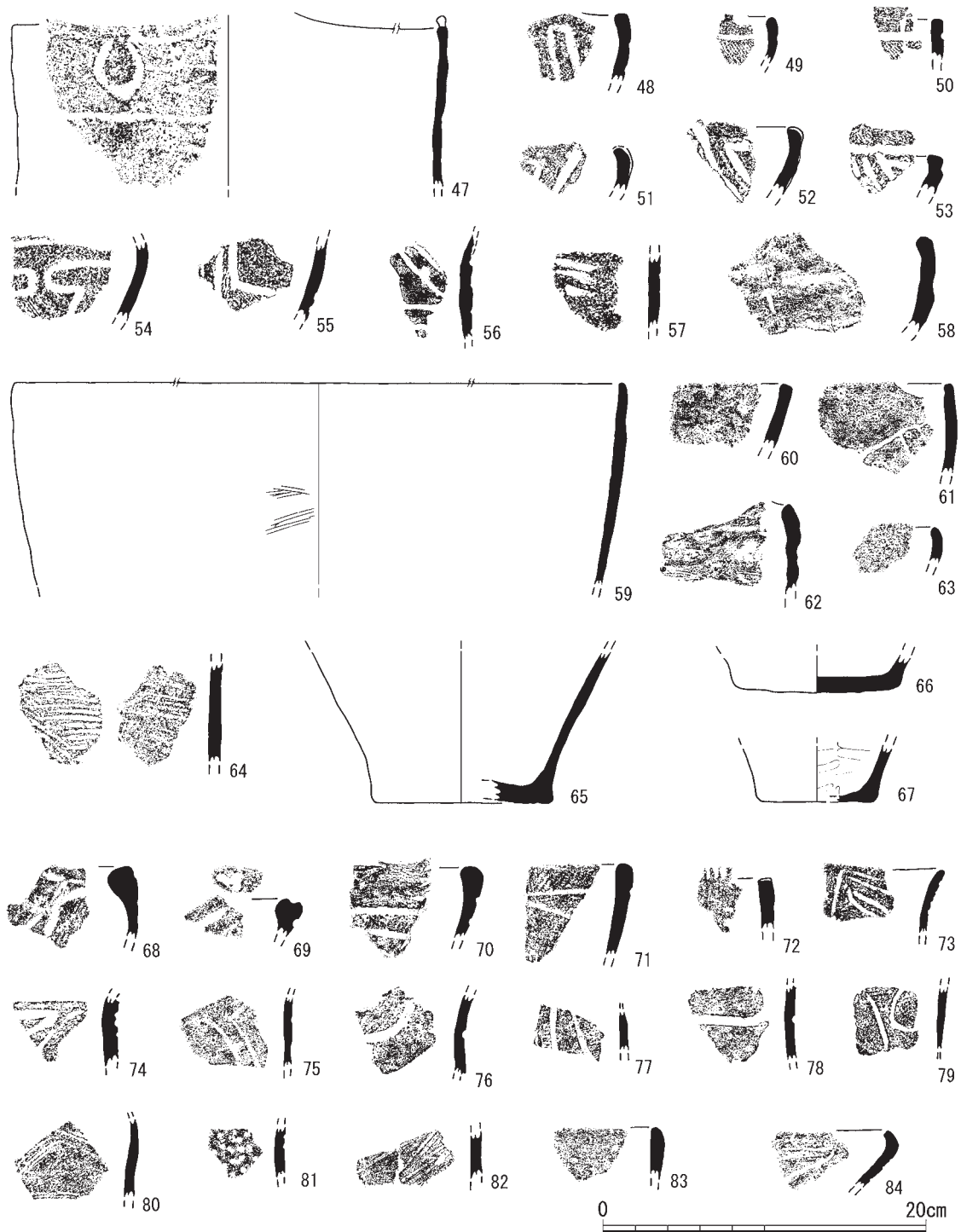
(増田孝彦)

②縄文土器(第24・25図、図版第14・15)

本遺跡で出土した縄文土器はその特徴から後期中津式から四ツ池式が中心であると考えられる。一部包含層から後期以前の遺物が出土している。全体的に摩滅を受けた遺物が多く詳細が明瞭に分かる遺物は少なかった。

土坑SK193 SK193出土土器は後期初頭中津式の所産であると考えられる。47～53は深鉢の口縁部である。47は口縁部に文様帯を持つ。ゆるい波状口縁を持ち、口縁に沿って二本の沈線で区画され、波底部に「U」字型のような文様を持つ。48は口縁が内湾し、ゆるい波状口縁となるものである。49は平縁のもので、口縁が内湾している。口端に沿って横走する一条の沈線を持ち、その下部にRL縄文が充填されている。50も平縁のもので、口端部が面取りされている。49と同様、口端下に一条の沈線が横走し、その下部にRL縄文が充填される。51～53は口縁が内湾し、非常に緩く波状口縁になっているものである。2～3条の斜行沈線によって文様が描かれていると考えられる。51・52は沈線間に縄文が充填されている。54～57は深鉢の胴部である。54はスベード形が垂下した文様を持っており、縄文が充填されている。中津式の特徴を持つものと考えられる。55は2条の沈線によって区画された文様を持つものと考えられ、2沈線間に縄文が充填されている。56は2条以上の沈線によって描かれたものであり、斜行線と横走線を組み合わせた文様となっている。57は文様がはっきりしないが、3本の短い沈線が描かれている。58～62は無文

の深鉢である。58は波状口縁の無文土器である。口縁から一段下がった所に薄くナデの痕跡を残す。成形・調整時の指痕を残し、器面に凹凸がある。59は角閃石を多量に含む胎土である。62は波状口縁の無文深鉢である。器面は巻貝条痕により調整され、58と同様、成形・調整時の指痕により器面に凹凸がある。63は口縁が内湾する無文の鉢であると考えられる。64は無文深鉢の胴部片である。外面は巻貝条痕を顕著に残す。内面は条痕調整後にナデが施される。65～67は深鉢の

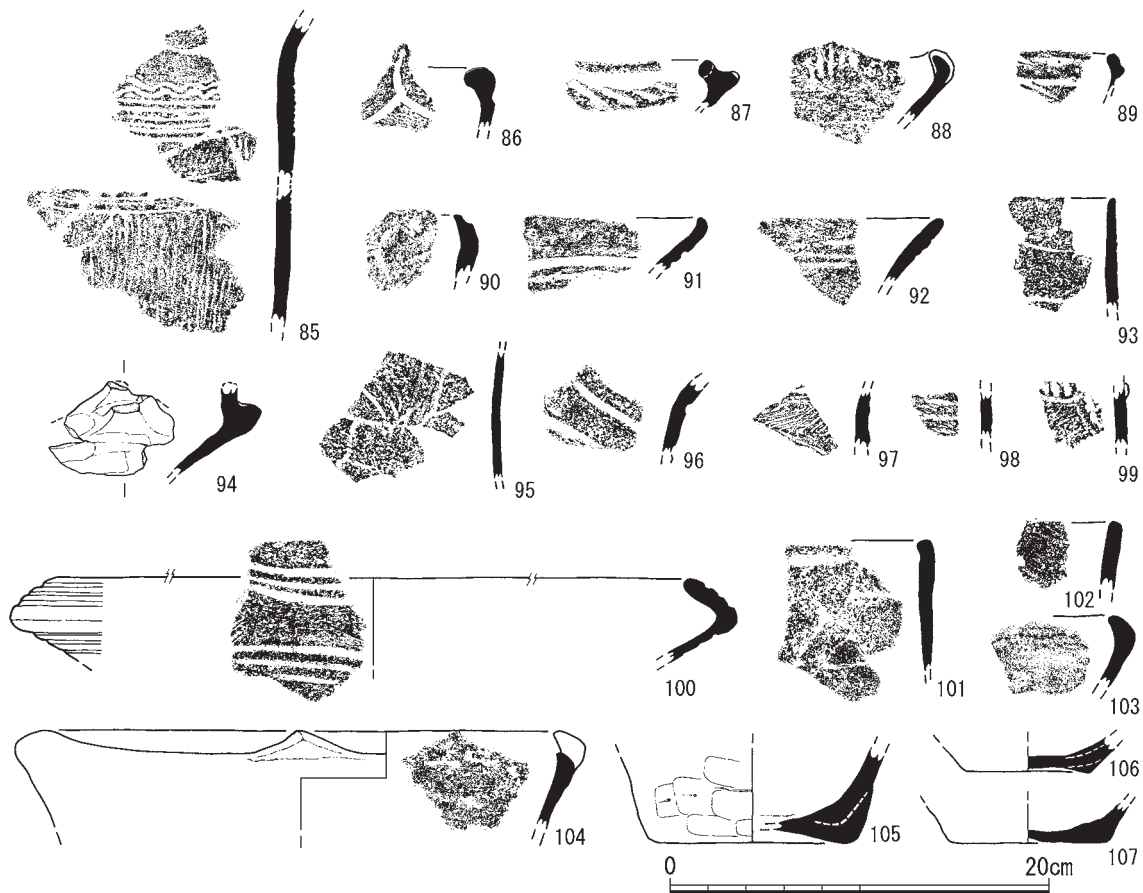


第24図 尾流地区出土遺物実測図(4)

底部である。

土坑SK194 SK194出土土器はおおよそ後期初頭中津式の所産であると考えられる。68～73は深鉢の口縁部である。68は口縁内側が肥厚するもので、波状の口縁となる。69は波状口縁の波頂部の一部と考えられ、波頂部内側に短い沈線が描かれる。70は口縁部が肥厚し、口端から一段下がったところに横走する2条以上の沈線が描かれるものである。71は口縁部がやや肥厚し口端から一段下がったところに沈線が巡り、その間にLR縄文が充填される。72は口端部に刻みを持つものである。73は直線の沈線の区画内に弧状の沈線2条が描かれる。74～79は有文深鉢の胴部片であり、沈線によって文様が描かれているものである。74は2条以上の沈線によって描かれる弧状の文様と、横走する沈線を組み合わせた文様と推定される。75は2条の弧状の沈線と斜行する沈線が描かれていると考えられる。76・77は弧状の沈線が描かれる。沈線間に縄文が充填されている。80～83は深鉢の胴部である。80は深鉢の胴部片である。外面に条線が施されている。81は刺突が施されている。摩滅が著しい。82は巻貝条痕を器面に残すものである。83は無文深鉢の口縁である。口縁部がやや肥厚している。84は口縁が内湾する浅鉢の口縁部片である。沈線による文様が描かれている。

包含層 中期～後期にかけての土器が出土している。85は里木Ⅱ式の深鉢胴部である。波状文の下に多条の直線文が描かれる。器面は摩滅しているが燃糸文が施されていると考えられる。86



第25図 尾流地区出土遺物実測図(5)

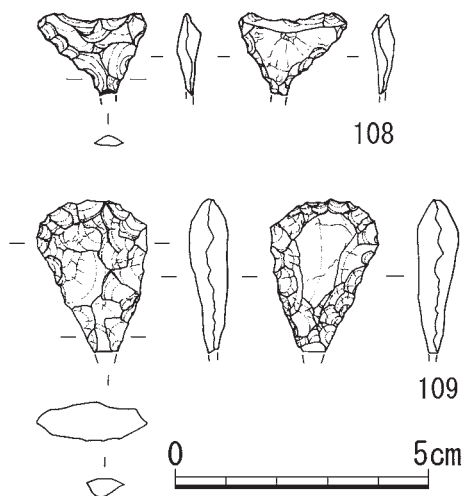
は波状口縁の波頂部である。口縁部に沿って沈線が描かれその下に縄文が充填されている。中津式であると考えられる。

87～90は四ツ池式の口縁部片であると考えられる。87は口唇部が内外に肥厚している。端部に凹線が巡っており、外側に斜刻が施される。88は波状口縁であり、口縁が内屈して肥厚する。波頂部に5条の縦方向の短沈線が描かれる。89は口縁部が肥厚するものである。90は摩滅が著しいが、緩い波状口縁の一部であると考えられる。波頂部の刺突とそこから延びる弧状の沈線によって描かれているものと考えられる。91～94は深鉢の口縁部である。91・92は平縁の深鉢であり、口端から一段下がったところに、3条の沈線が横走しているものである。福田KⅡ式か。93は沈線によって文様が描かれているものである。94は「く」字状に内屈する口縁を持ち、橋状の把手を持つものと考えられるが、一部欠損している。外面は無文である。95～99は深鉢の胴部片である。95は斜行した3条の沈線に、同心円状の3条の沈線が連結したものであると考えられる。他の土器に比べ沈線が細いものとなっている。96は斜行する沈線が描かれている。97は多重の条線が施されているものである。98は縦長の節の繊維痕の粗い縄文が施文されているものである。船元Ⅰ～Ⅱ式の特徴を持つものである。99は粘土紐を貼り付けたものに刻みを施したものである。100は「く」字型に内屈する口縁を持つ浅鉢である。口縁に沿って三本の沈線、また屈曲部から下がったところに三本の沈線が描かれている。福田KⅡ式であると考えられる。101～104は無文深鉢の口縁部片である。101・102は広口の深鉢である。101は口縁内面に凹線のようなナデが巡っている。103はやや口縁が肥厚し内湾している。104は波状口縁の無文深鉢である。105～107は底部である。106には一部7～8mmほどの礫が土器胎土に含まれている。107は角閃石を多量に含む胎土である。無文土器、底部もおよそ後期前半に含まれるものと考えられる。

(木村啓章)

③石器(第26図、図版第16)

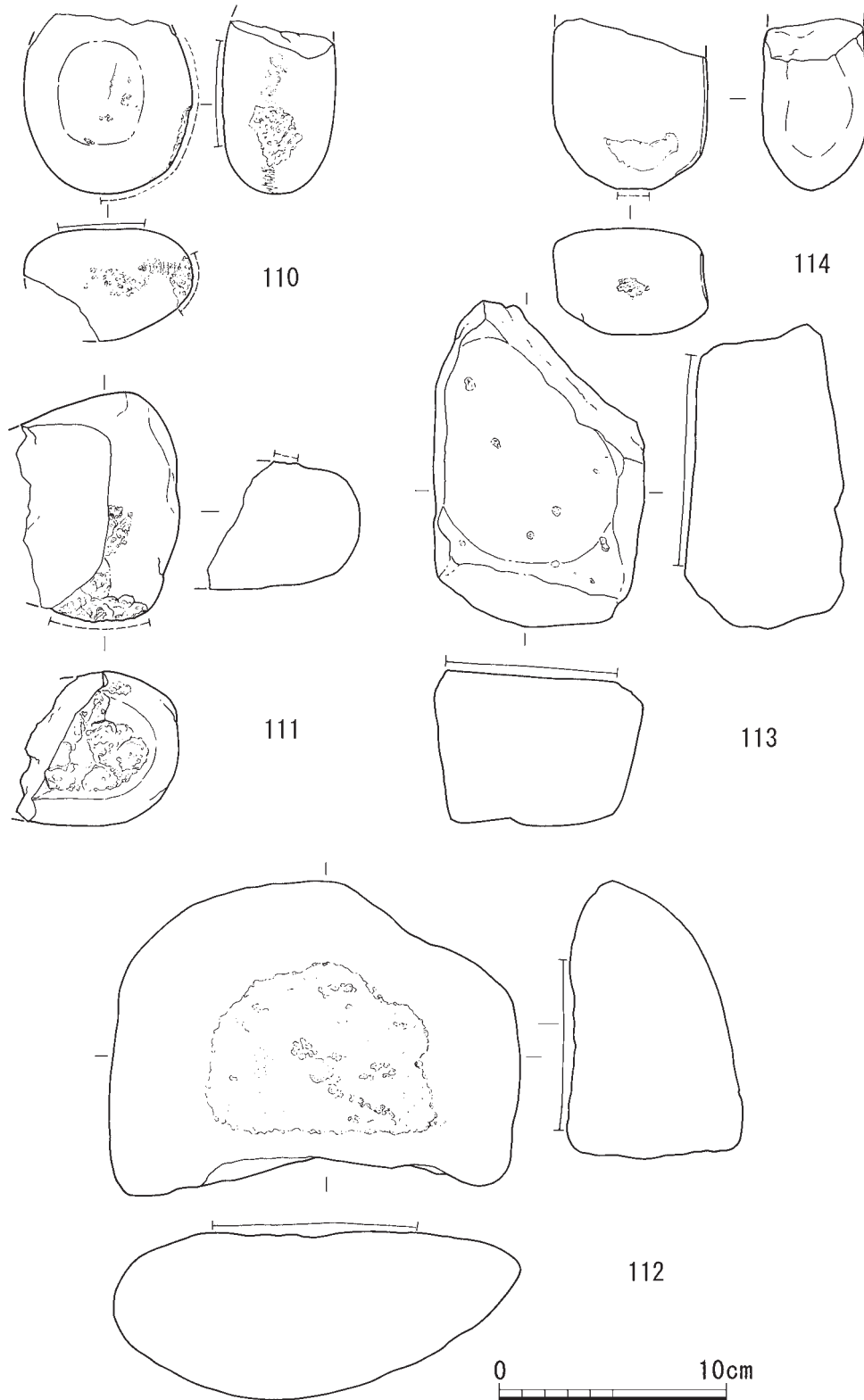
出土した石器の器種は、石錐2点、敲石類3点、台石または石皿2点である。



第26図 尾流地区出土遺物実測図(6)

刺突具である石錐(第26図108・109)は、いずれも先端部を欠損している。108は、三角形に整形されたつまみ部で、先端に向かう両側縁部を入念に調整している。残存長1.6cm、幅2.2cm、厚さ0.5cm、重さ1.3gを測る。石材はサヌカイトである。109は、片面および周縁部を細かく剝離し、端部は丸く整形している。先端部に向かってひときわ細かな調整が認められる。残存長3cm、幅2.2cm、厚さ0.8cm、重さ4.8gである。石材はサヌカイトである。108はS K14、109は包含層より出土した。

ここでの敲石類とは、打撃による敲打痕・剝離痕、打裂痕などをもつ敲石と、磨痕をもつ磨石を総称し



第27図 尾流地区出土遺物実測図(7)

ている(第27図110~112)。111・112はS K193、110・113はS K194、114は縄文土器包含層から出土した。110は、肉厚の楕円形礫を素材とする。片側表面にわずかな範囲に磨面が、さらに下端から右側縁にかけて小さく何度も打撃されたあばた状の潰れ痕がみられる。残存長7.7cm、幅

7.4cm、厚さ5cmを測り、重さ580gである。石材は砂岩である。111は、表面左側を大きく破損しているが、表面中央部に打撃による明瞭な凹みと、下端部にはさらに激しい打撃による剝落痕および潰れ痕が広く認められる。長さ10.3cm、幅6.8cm、厚さ6.7cm、重さ370gを測る。石材は礫岩である。114は、肉厚の素材で上半部を欠損している。下端部に比較的軽微な敲打痕(1×1.5cm)および右側面に滑らかな磨面をとどめている。残存長7.5cm、幅6.8cm、厚さ4.8cm、重さ340gである。石材は砂岩。

112は台石または石皿で、やや不整形な隅丸四角形を呈し、片側表面にのみ中央部がわずかにへこむ使用痕をとどめている。磨った形跡はなく、敲打によるものである。長軸17.9cm、短軸12.1cm、厚さ7.3cm、重さ2,240gである。石材は花崗岩である。113は台石または石皿で、厚みのある不定形な礫を素材に、上端は大きく打裂している。片側表面にのみ、磨ったり敲いたりして使用した可能性もあるが、明瞭ではない。残存長14.5cm、幅9.2cm、厚さ6.9cmを測り、重さ1,420gである。石材は砂岩である。

敲石類および台石または石皿の特徴から、石器製作などの工具的色彩が濃厚である。

(黒坪一樹)

(4)小結

尾流地区の調査では、縄文時代後期、弥生時代後期、古墳時代後期の遺構・遺物、奈良時代の溝・遺物を確認できた。縄文時代後期の土坑は、右京第957次調査でも確認している。縄文時代の下海印寺遺跡では、背後の台地上だけでなく河岸段丘上でも早くから生活の場として営まれており、その集落域が現在の小泉川付近まで広がっていることが明らかとなった。

長岡京期に関しては、確実に長岡京に比定できる遺構は検出されなかった。しかし、SD70からは奈良時代の遺物がわずかながらも出土したことから、周辺に長岡京期の遺構が存在する可能性がある。今回の調査は、各時代の集落の形成と場所、広がりを考えていく上で重要なものとなる。

(増田孝彦)

3)方丸地区

(1)はじめに(第28図、図版第10～12)

方丸地区の調査地は長岡京市下海印寺方丸に所在し、縄文遺跡として著名な下海印寺遺跡に含まれる。この地区では平成20年度に右京第947・956次調査を実施しており、第947次調査では縄文土器の出土する包含層および段丘の落ち込みを確認し、第956次調査では平安時代の土坑・溝を検出し、石製の跨帯(巡方)と馬と考えられる獣骨などが出土した。

今回の調査対象地は、里道等により調査地が3分割されているため、A～Cトレンチを設定し調査を実施した。A～Cトレンチは、第947・956次の調査トレンチを拡張する形で設定した。

調査対象地の現況は宅地跡であり、尾流地区よりも道路を挟んで4.5m上方の低位段丘縁辺部に位置する。調査は、まず、住宅の造成による盛土を重機により掘削した後、手掘りによる掘削を行った。現地調査の期間は平成21年6月8日～平成21年10月13日までを要し、調査面積は540

m²である。調査には、調査第2課調査第2係係長森正と同主任調査員戸原和人、同増田孝彦、専門調査員竹井治雄があたった。

なお、各トレンチで検出した溝跡は同じ溝であると判断し、同一の遺構番号を付している。

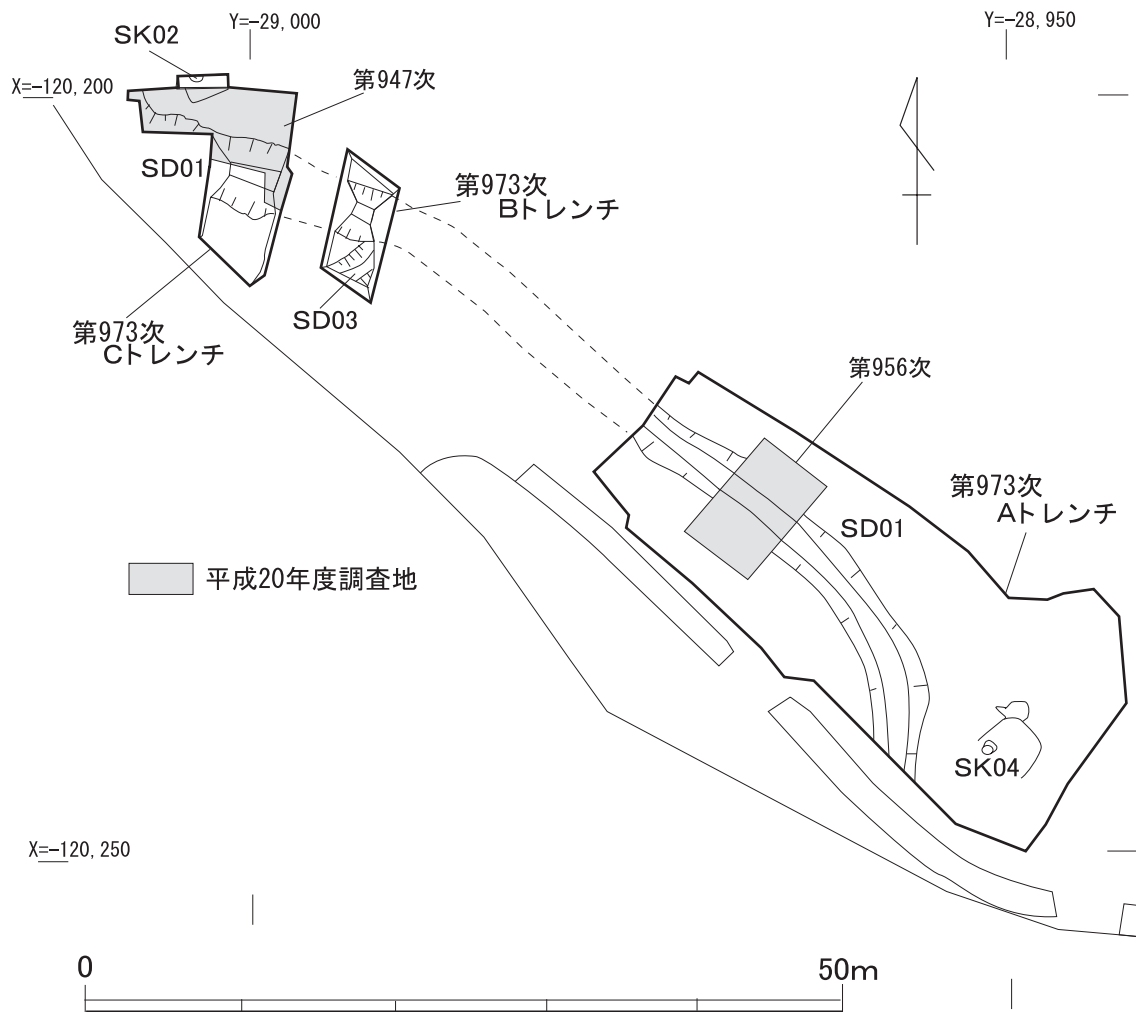
(戸原和人)

(2) 検出遺構

① Aトレンチ(第28図、図版第10)

表土(盛土)下約50cmで基盤層である褐色砂礫土となり、この上面が遺構検出面となる。検出した遺構は、台地縁辺部に沿って西北西から東南東方向に延びる溝SD01、溝SD01の南端東側で土坑SK04を検出した。周辺ではピットを検出したものの、第956次調査で出土した跨帯や獣骨に関する遺構や遺物は検出しなかった。

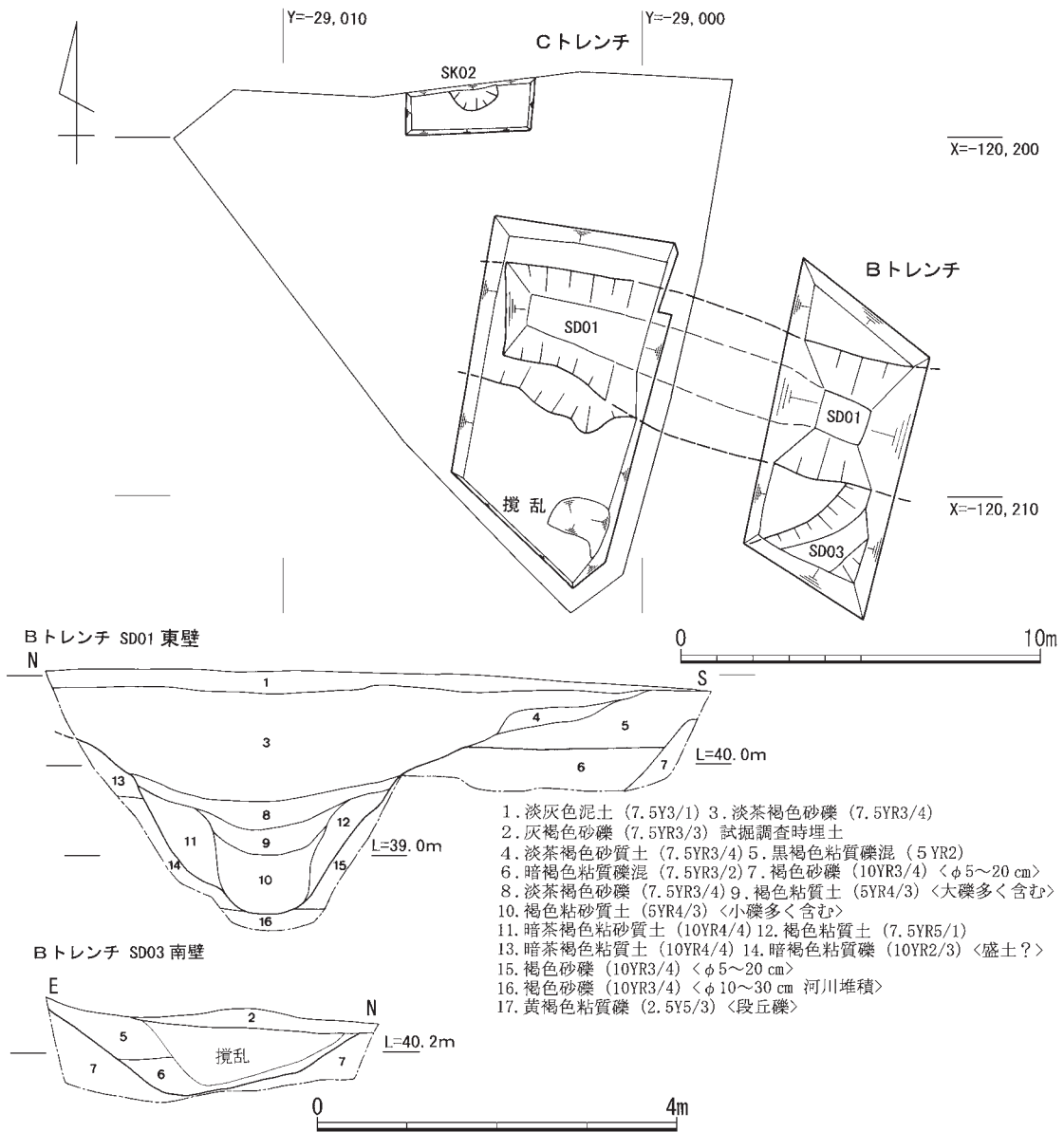
溝SD01(図版第10) A~Cトレンチのそれぞれで検出した溝で、同一の溝と判断されるものである。丘陵部の地形に沿って西北西から東南東に伸びており、Aトレンチ南端部で南に屈曲する。総延長66mを検出した。また、Cトレンチ北西部では地形に沿って北方向に曲がると思



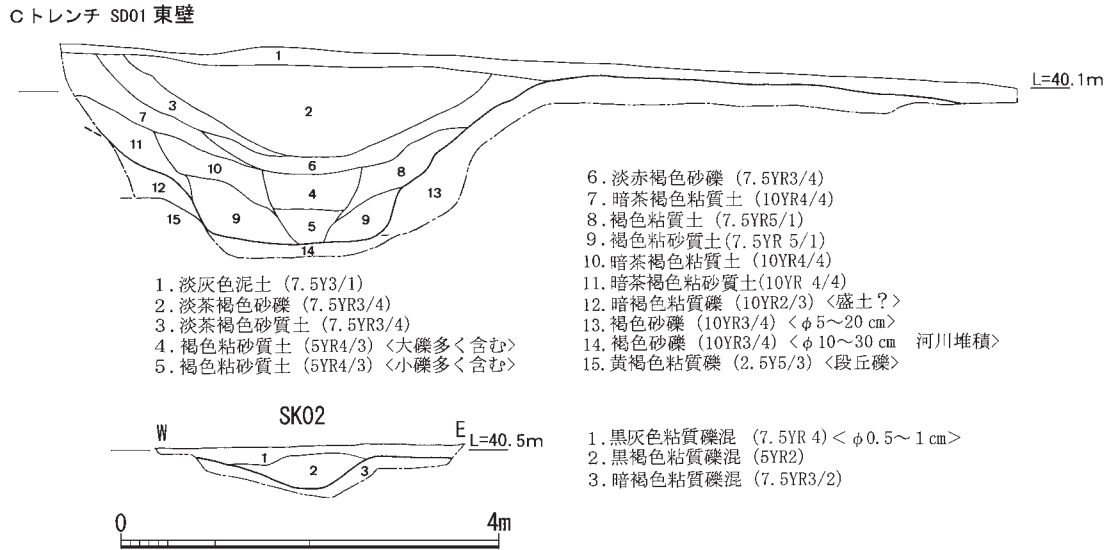
第28図 方丸地区トレンチ配置図

られる。溝の幅は遺構の遺存状態の最も良いBトレンチで3.5m、検出した深さは約1.7mを測るが、後述のように溝肩部は崩落した状況であることから、本来はさらに深いものであったと考えられる。

第29図のBトレンチで見ると、溝内は第3・4・8～12層の7層の土砂で埋まっている。ただし、最上層の第3層淡茶褐色砂礫は、近年まで凹み状に残っていたものを造成により埋めたものである。土層の観察より、第5・6・13～16層をベースに最初の溝が掘られ、丘陵側の第13層が溝内で再堆積した第11層と平野部側の第12層で、溝がある程度埋まった段階で第8～10層の部分が掘り直されている状況が認められた。第12層の褐色粘質土層からはAトレンチで完形の瓦器碗(116)が出土している。第10層の下面では水の流れていた砂粒や水が溜まっていたことを示す泥土などは一切認められず、少なくともこの溝が掘り直されて埋まるまでの間は常時、水をたたえ



第29図 方丸地区B・Cトレンチ平面図、Bトレンチ東・南壁土層断面図



第30図 方丸地区Cトレンチ東壁・土坑SK02土層断面図

ることはなかったようである。このことから、最終段階では第10～8層の順で一気に埋め戻しを行っているものと思われる。これらの埋土より瓦器椀、白磁・青磁片が出土している。

CトレンチではBトレンチとは異なり、第2層の砂礫により埋められるまで丘陵側、平野部側からの土砂の流れ込みが認められる(第30図)。ただ、第8～10層までの堆積があった後、第4・5層の部分が掘り直されていることはBトレンチ同様である。第12層は溝掘削以前の堆積層と判断されるが、遺物の出土はない。Aトレンチ部分の埋土下層より、土師器皿(115)、瓦器椀(116)が、上層より瓦器椀(117)、無釉陶器(119)、須恵器底部(120)が出土した。

土坑SK04(図版第11) 直径0.6m、深さ0.1mの規模を測り、埋土中より須恵器杯身(122)、土師器高杯(123)が出土した。周辺の検出状況より、竪穴式住居跡に伴う貯蔵穴の可能性もあるが遺存状態が悪く、明確な遺構として認識できない。

②Bトレンチ(第29図、図版第11・12)

Cトレンチの東側2.7mに設けたトレンチで、4.0×7.6mの調査区を設定した。トレンチのほぼ全域が溝SD01にあたり、東南隅で南西から北東に延びるSD03を検出した。溝SD01と切り合い関係を有し、下層遺構となる。

溝SD03 幅1.7m以上、検出長約3mで、深さ約80cmを測る。後世の攪乱により遺構の大半が失われている(第29図BトレンチSD03南壁土層図)が、溝内部には2層の埋土が認められる。第5層から弥生土器(125)、第6層から縄文土器(129)、須恵器杯蓋(121)が出土した。周辺でこの溝の延長部分は確認されていない。

③Cトレンチ(第30図、図版第12)

方丸地区の西端に設けたトレンチである。昨年度に調査を行った第947次調査では、トレンチ南側で段丘の落ち込みを検出したが、その落ち込みがSD01の肩部になることが予想されたため、昨年度のトレンチを南側に拡張した。

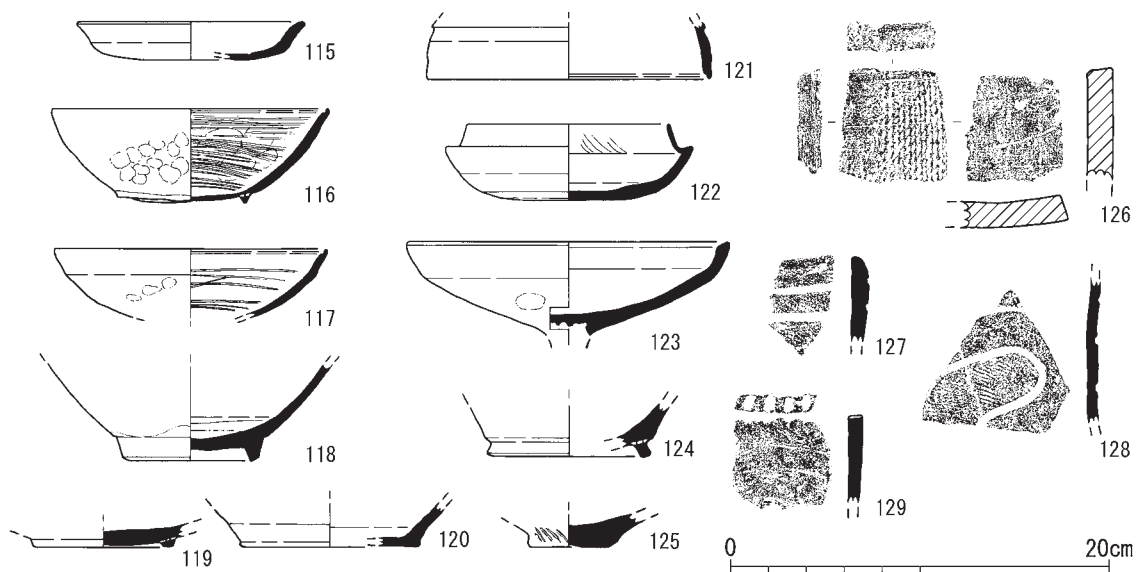
土坑SK02(第29・30図) 第947次調査で土器の小片が見つかったことによりサブトレンチを

設け調査を実施した。調査の結果、上層の第1層中より長岡京期と考えられる土馬の小片が出土し、土坑状の凹みの第2層より縄文土器片(128)が出土した。土坑は北半部が調査地外であり、隅丸方形を呈する。規模は、東西1.4m、南北(現存)0.6m、深さ0.35mを測る。

(3) 出土遺物(第31図・図版第16)

方丸地区で出土した遺物は、整理箱にして2箱である。

115はAトレンチS D01出土の土師器皿で、口径12cm、器高2cmを測る。116はAトレンチS D01から出土した瓦器碗で、口径14.6cm、器高5.0cmを測る。口縁部内面に丁寧な横方向の暗文を施し、口唇部内面にヘラによる沈線文を施す。外面は指押さえによる成形がなされている。117は同じく瓦器碗で、A・BトレンチのS D01から出土したものが接合した。口径14.4cm、残存高3.4cmを測る。口縁部内面に粗い横方向の暗文を施し、口唇部内面にヘラによる沈線文を施す。118はAトレンチS D01から出土した白磁碗である。高台内面に墨痕が認められるが読み取れない。119はAトレンチS D01より出土した無釉陶器底部である。底部径7.4cmを測る。120はAトレンチS D01から出土した須恵器の壺もしくは甕の底部である。底部径9.2cmを測る。121・122は古墳時代の須恵器杯蓋・杯身である。121はBトレンチS D03の上面で出土し、口径14.8cmを測る。122・123はAトレンチS K04の出土で、122は口径10.6cm、器高4.2cmを測る。123は土師器高杯である。杯部の口径16.9cm、器高5.0cmを測る。124はAトレンチの包含層から出土した須恵器の底部である。125はBトレンチS D03下面より出土した弥生土器甕の底部である。底部外面にタタキが施されている。126はAトレンチS D01から出土した平瓦である。凸面に縄タタキ、凹面にナデ調整を施す。127～129は、後期初頭の中津式と考えられる縄文土器である。127はAトレンチの包含層から出土した。口縁部一段下がったところに2条の横走る沈線が描かれ、縄文が充填される。128はCトレンチS K03下層から出土したもので、蛇行した沈線により区画された文様が描かれ、その内部に縄文が充填されている。129はBトレンチS D03の第6層から出



第31図 方丸地区出土遺物実測図

土した無文深鉢の口縁部片である。口縁部端部に刻みをもつ。

(4) 小結

A～Cトレンチで検出した溝S D01は、出土した遺物から12世紀後半以前に掘削されたと考えられる。この溝は周辺の調査でも確認されておらず、下海印寺集落が成立したであろう時代の状況・景観を考える上で重要な発見と言える。

(戸原和人・竹井治雄)

6. まとめ

今回報告した調査は、奥海印寺から下海印寺地域にわたる約1.3kmの範囲において、4地区で実施したものである。

西代遺跡は東向きの緩斜面で、居住に適していると考えられる地域に立地している。平成21年度の長岡京市の発掘調査によって古墳時代から中世までの包含層が発見され、周知の遺跡として認識された。長岡京市教育委員会の調査地点は、当調査研究センターの調査地点に比べ川に近く、高度の低い段丘面上に位置しており、段丘礫と考えられる礫層が検出されている。今回の調査では9か所のトレンチを設定したが、すべてのトレンチで大阪層群の緻密な粘土層を基盤層として検出した。耕作土中からは若干の遺物が出土しているが、原位置をとどめたものはなかった。段丘礫も検出できなかったことから、段丘に接続する丘陵地を中世以後に開削し、現在の水田面が成立したものと考えられる。

新郷地区では、近世以後の耕作関連土層の下で河川堆積物を検出した。遺構・遺物は検出できなかった。

駿河田地区では、住宅建設に伴う盛土、旧耕作土を掘り下げたが明確な遺構面は検出できなかった。地表下約2mまで掘削し、河川堆積物の連続を確認したにとどまった。

長岡京跡右京第973次・下海印寺遺跡の調査は、尾流地区と方丸地区で実施した。

尾流地区では2間×2間の総柱の掘立柱建物跡1棟、弥生時代後期の竪穴式住居跡1棟、古墳時代後期の竪穴式住居1棟、縄文時代後期の土坑2基等を検出した。今回の調査地点は河川に近く、調査地西側は近世の河川によって削られており、沖積面の広がり方から見て、今回の調査地も旧小泉川に近接した場所であることがわかり、下海印寺遺跡の末端に位置することがわかった。

方丸地区では、A～Cトレンチの3か所の調査を実施した。いずれのトレンチでも幅4m程度の等高線に並行する中世の溝を検出することができ、その規模・方向から、同一の溝であると判断した。土地の区画を目的にしたものと想定できるが、その性格については不明である。

今回の一連の調査によって、これまで必ずしも明確でなかった長岡京市域南西部の遺跡の性格や広がり的一端を明らかにすることができた。

(中川和哉)

参考文献

- 岩松保ほか「京都第二外環状道路関係遺跡平成15年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第113冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2005
- 岩松保ほか「大山崎大枝線道路改良事業関係遺跡報告書」(『京都府遺跡調査報告集』第133冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2009
- 岩松保ほか「京都第二外環状道路関係遺跡平成16年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第118冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2006
- 岩松保ほか「京都第二外環状道路関係遺跡平成17年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第124冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2007
- 岡崎研一ほか「京都第二外環状道路関連遺跡平成20年度発掘調査報告」(『京都府遺跡調査概報』第137冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2010
- 木村泰彦「西代遺跡第1次調査(4 LNPNI-1 地区)調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第55冊 長岡京市教育委員会)2010
- 中川和哉「京都第二外環状道路関係遺跡長岡京跡(長岡京跡右京第927次)・伊賀寺遺跡」(『京都府遺跡調査報告集』第136冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2010
- 中川和哉・高野陽子ほか「京都第二外環状道路関係遺跡平成19年度発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第131冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2009
- 中川和哉・戸原和人「京都第二外環状道路関係遺跡平成18年度発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第126冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2008
- 増田孝彦「長岡京跡右京第910次(7ANOIR-5・NNT-3 地区)・941次(7ANOOD-5・OIR-7・NNT-4 地区)・友岡遺跡・伊賀寺遺跡発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第133冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2009

圖 版

西代遺跡



(1)西代地区1 トレンチ(北東から)



(2)西代地区2 トレンチ(東から)



(3)西代地区3 トレンチ(東から)

西代遺跡



(1)西代地区4トレンチ(東から)



(2)西代地区5トレンチ(東から)



(3)西代地区6トレンチ(東から)

西代遺跡



(1)西代地区7トレンチ(南から)



(2)西代地区8トレンチ(東から)



(3)西代地区9トレンチ(北東から)



(1)新郷地区全景(西から)



(2)新郷地区トレンチ(北西から)



(3)駿河田地区トレンチ(東から)



(1) 尾流地区調査前の状況
(北西から)



(2) 尾流地区上層遺構全景
(北東から)



(3) 尾流地区竪穴式住居跡 S H05
(北東から)



(1) 尾流地区竪穴式住居跡 S H140
(北東から)



(2) 尾流地区掘立柱建物跡 S B184
(南西から)



(3) 尾流地区土坑 S K14(南から)



(1) 尾流地区溝 S D130 全景
(南東から)



(2) 尾流地区溝 S D130
遺物出土状況(南から)



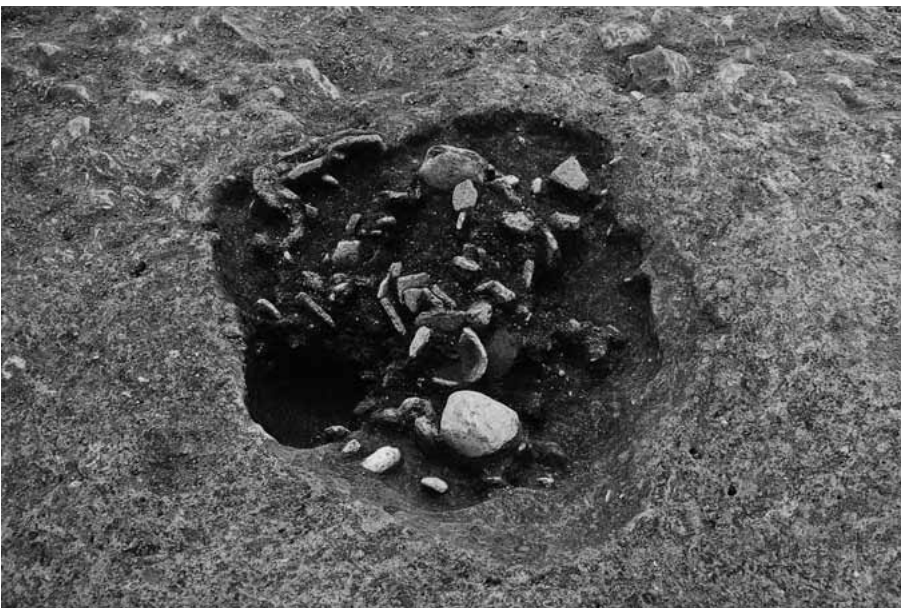
(3) 尾流地区下層遺構全景
(北東から)



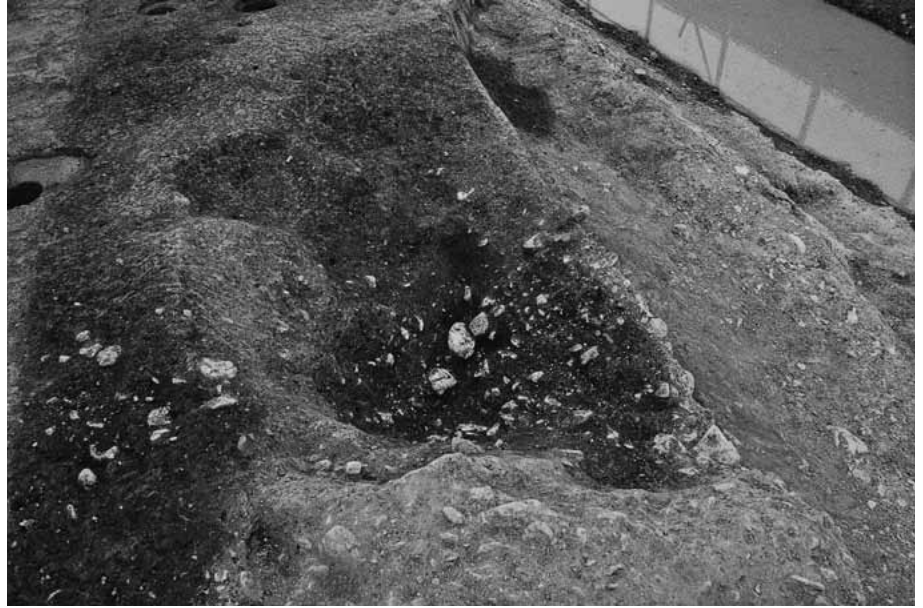
(1) 尾流地区下層遺構全景東側部分
(南東から)



(2) 尾流地区下層遺構全景西側部分
(南東から)



(3) 尾流地区土坑 S K193
遺物出土状況(北西から)



(1)尾流地区土坑S K193完掘状況
(東から)



(2)尾流地区土坑S K194
遺物出土状況(北西から)



(3)尾流地区土坑S K194完掘状況
(東から)



(1) 方丸地区調査前全景(南東から)



(2) 方丸地区Aトレンチ全景
(南東から)



(3) 方丸地区Aトレンチ溝S D01
遺物出土状況(北から)



(1) 方丸地区Aトレンチ土坑SK04
遺物出土状況(北西から)



(2) 方丸地区Aトレンチ土坑SK04
完掘状況(北西から)



(3) 方丸地区Bトレンチ全景
(北西から)



(1) 方丸地区Bトレンチ S D01断面
(北西から)



(2) 方丸地区Cトレンチ全景
(西から)



(3) 方丸地区Cトレンチ S K02全景
(南から)



